大県南遺跡

－仮称健康福祉センター建設に伴う－

1999年3月

柏原市教育委員会

巻頭図版一　調査地航空写真（北側から）同（西側から）

北側から

西側から

巻頭図版二　生駒山地南端部遠景（船橋遺跡から望む）　生駒西麓部平野部遠景（生駒山地から望む）

船橋遺跡から望む

生駒山地から望む

巻頭図版三　調査区北半部全景（南側から）同（北側から）

南側から

北側から

巻頭図版四　調査区南半部全景（西側から）同（東側から）

西側から

東側から

はしがき

柏原市は、河内平野の南東部に位置し、市域のおよそ3分の2が山地や丘陵で占め、その間を縫って石川や大和川が流れる府下でも有数の風光明媚な緑が多い町です。近年、開発優先よりも環境保全や自然保護の気運も高まっています。

生活住環境や学校施設、植栽などを整備するための公共事業を市内各所で実施しています。これらの事業する場所は市内遺跡範囲の内外にありますが、遺跡内については発掘や立会調査など必要な措置を執っています。

今回報告する内容は、福祉事業の一環として仮称健康福祉センターの建設に伴う発掘調査です。調査した遺跡の内容は、柏原市内の中心的な位置や役割が想定されていた遺跡でありましたので、時期や規模など当初考えていた以上の成果を示すものでした。

今回の調査区は、飛鳥・白鳳時代創建の古代寺院『大県南廃寺』（山下寺）の寺域に入り、約10年前当調査区の東方地に古代寺院に関わる軒丸瓦や平瓦が多量に出土した調査事例の地点が近隣にありました。その後、河川改修や個人住宅、マンション建設等の調査で寺院関連の遺構や遺物が非常に少ない成果がありましたので、寺院に関係する遺構や遺物が如何なる形で出土するのか興味がある反面その内容が直接寺院の伽藍や付属の施設等あれば遺跡保存の立場から危惧される面もありました。

出土遺物の主な時代は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥・白鳳時代、近代のものです。寺院に関わる遺物は少なかったけれど、その背景となる集落の遺構、近代の格納庫などに伴う遺物が多数検出され、当初の予想を大きく変えるものではなく、貴重な資料を得たものであります。

この調査に伴い、地主さんや市民の方々に御迷惑や御無理を申しましたが、文化財や公共的な施設建設に伴う事業で御理解と御協力を頂きました。また、本書作成に各方面の方々に御指導頂きました。今回の報告にはご教示内容を成果として掲載出来ませんでしたが、今後何らかの形で明らかにしていきたいと思います。

平成11年3月

柏原市教育委員会
教育長　舟橋清光

例　　言

1．本書は、平成９年度柏原市教育委員会が公共事業として実施した埋蔵文化財の発掘調査で仮称健康福祉センターに伴う事前緊急発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として、
試掘調査は、平成９年６月１６日から同年６月１８日、
本調査は、平成９年８月６日から同年１１月７日まで実施した。

3．調査の実施や整理にあたり下記の方々から御教示を頂きました。記して感謝致します。
地主の高井豊幸、市会議員　中野広也、大阪府文化財調査研究センター　駒井正明、陸上自衛隊八尾駐屯地一等陸尉　今泉里司（敬称は略）

4．調査の実施と整理にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

橘谷和夫	柳谷好子	長西茂樹	川端　隆	安村俊史
石田成年	寺川　款	谷口京子	谷川洋史	阪口文子
槇原美智子	藤川富久子	尾野絹江	冨田都子	浅野正子
乃一敏恵	有江マスミ	村口ゆき子	松本和子	山本允子
橋口紀子				

5．本書の編集は、北野が行い、執筆は北野、遺物は槇原が担当した。

6．本書で使用した方位と高さは特に表示しない限り磁北、Ｔ．Ｐ．である。

目　　次

第１章　調査に至る経過…… 1
第２章　位置と環境…… 2
第３章　調査の概要…… 3
　第１節　試掘調査…… 3
　第２節　調査の概要…… 4
　第３節　遺構…… 4
　第４節　遺物…… 11

挿　図　目　次

図－１　柏原市位置図…… 1
図－２　調査区位置図…… 2
図－３　トレンチ位置図…… 3
図－４　第１トレンチ断面図…… 3
図－５　第２トレンチ断面図…… 3
図－６　第７トレンチ断面図…… 3
図－７　建物１…… 6
図－８　建物２…… 6
図－９　建物３…… 6
図－10　建物４、５…… 6
図－11　建物６…… 7
図－12　建物７…… 7
図－13　建物８…… 7
図－14　建物９…… 7
図－15　土坑11…… 8
図－16　土坑14…… 8
図－17　土坑17…… 8
図－18　土坑18…… 8
図－19　土坑１…… 9
図－20　土坑８…… 9
図－21　土坑４…… 9
図－22　土坑10…… 9

図－23　土坑15…… 9
図－24　土坑12、13、16…… 9
図－25　土坑19…… 9
図－26　格納庫…… 10
図－27　溝出土遺物…… 11
図－28　建物出土遺物…… 11
図－29　ピット出土遺物…… 12
図－30　土坑７出土遺物…… 12
図－31　土坑出土遺物…… 12
図－32　土器溜まり出土遺物…… 13
図－33　包含層出土遺物その１…… 14
図－34　包含層出土遺物その２…… 15

図　版　目　次

巻頭図版－１　調査地航空写真（北側から）　同（西側から）
巻頭図版－２　生駒山地南端部遠景（船橋遺跡から望む）
生駒西麓部平野部遠景（生駒山地から望む）
巻頭図版－３　調査区北半部全景（南側から）　同（北側から）
巻頭図版－４　調査区南半部全景（西側から）　同（東側から）
図版－１　調査地位置図
図版－２　字名図
図版－３　遺構概略図
図版－４　溝１、２、10、14
図版－５　土坑３、９、20
図版－６　調査前風景（南側から）　同（北側から）
図版－７　調査区北半部（航空写真）　調査区南半部（航空写真）
図版－８　試掘調査　第７トレンチ　Ａ区調査区（西側から）
図版－９　Ａ区調査区（南側から）　溝１
図版－10　溝２　土坑１
図版－11　Ｂ区調査区（南側から）　同（北側から）
図版－12　土坑３（南側から）　同（北側から）
図版－13　建物２　建物４
図版－14　建物５　建物６

図版－15　調査区北半部全景（南西側から）　同（北側から）
図版－16　建物１（北側から）　同（東側から）
図版－17　土坑７（東側から）　同（南西側から）
図版－18　建物３　土坑９
図版－19　格納庫跡（北半部）　同（南半部）
図版－20　土坑11　土坑12、13
図版－21　土坑14（東側から）　同（北側から）
図版－22　土坑16　建物９
図版－23　土坑17　土坑18
図版－24　建物７　建物８
図版－25　土坑19　同石列
図版－26　土坑20　氾濫源
図版－27　出土土師器　出土須恵器
図版－28　縄文土器、鉄滓　格納庫出土遺物

第１章　調査に至る経過

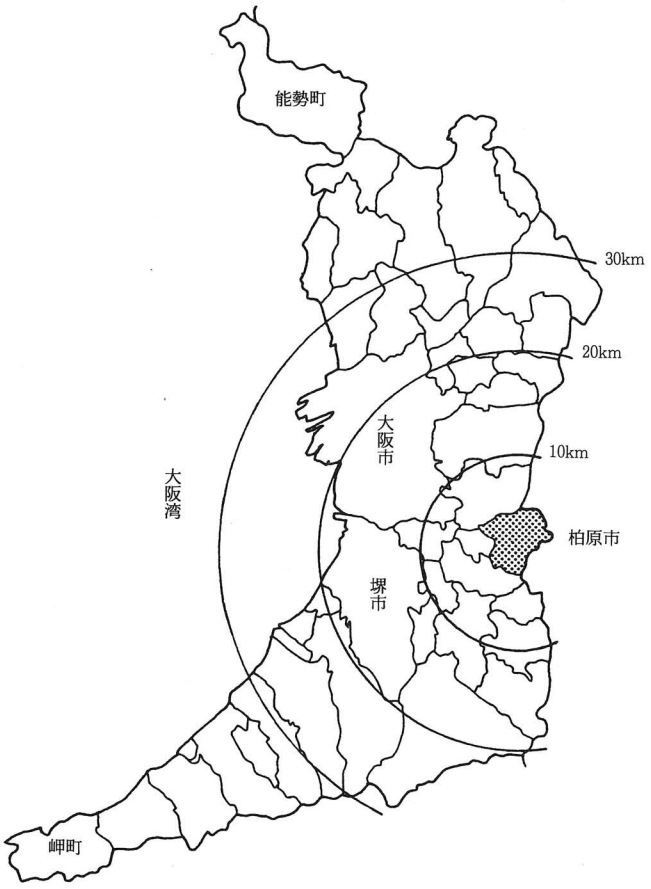
柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の間に連なる生駒山地の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63kmを測る大阪府下30市中第19番目の面積（24.77㎢）を擁する小都市である。行政区画は、奈良県と境に接する内陸部にあり、奈良県側の市町は、生駒郡三郷町、同郡王子町、葛城郡に属する香芝市の３市町があり、大阪府側の市は、八尾市、藤井寺市、羽曳野市の３市が隣接して四周を囲んでいる内陸部に立地している。

この地域は、旧石器時代から弥生時代にかけてのサヌカイト製石器原石、古墳築造の竪穴式石室の安山岩板石や凝灰岩製石棺材、横穴式石室石材の花崗岩などの石材産出地であることから、永く重要な供給地としての役割を果たした地域で古代からその交易と搬出が長期間継続して繰り返されて多くの集落が活発な活動と成長してきた地域である。

当該地は、信貴山へ通じる関電道路が南接し竹取物語に登場する業平街道に東接し、大県ちびっ子広場として柏原市が地元の地主さんから貸与されて利用していた土地である。

歴史的な中心の一つは、飛鳥時代から奈良時代にかけて生駒山地西麓部に建立された河内六寺の古代寺院があり、北側から平野廃寺（三宅寺）、大県廃寺（大里寺）、大県南廃寺（山下寺）、太平寺廃寺（智識寺）、安堂廃寺（家原寺）、高井田廃寺（鳥坂寺）と称する。今回の調査区は、大県南廃寺の推定地内に入り、近接した調査例では寺院関係の遺物や同時期の集落が多数見られる。

柏原市が計画した福祉施設（仮称健康福祉センター）には幾つかの候補地があったが最終的な場所として今回の場所が決定し、平成９年４月11日文化財保護法第57条の３に基づく発掘調査通知書が提出された。教育委員会に依頼があり、遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。試掘調査は、当該地内に７カ所のトレンチを設定した。各トレンチによって深度が異なり、削平を受けた部分も認められたが全体に重複した時代の遺構や遺物が確認された。平成９年８月６日から、同年11月７日まで発掘調査を実施し今回報告する内容の文化財成果が得られた。



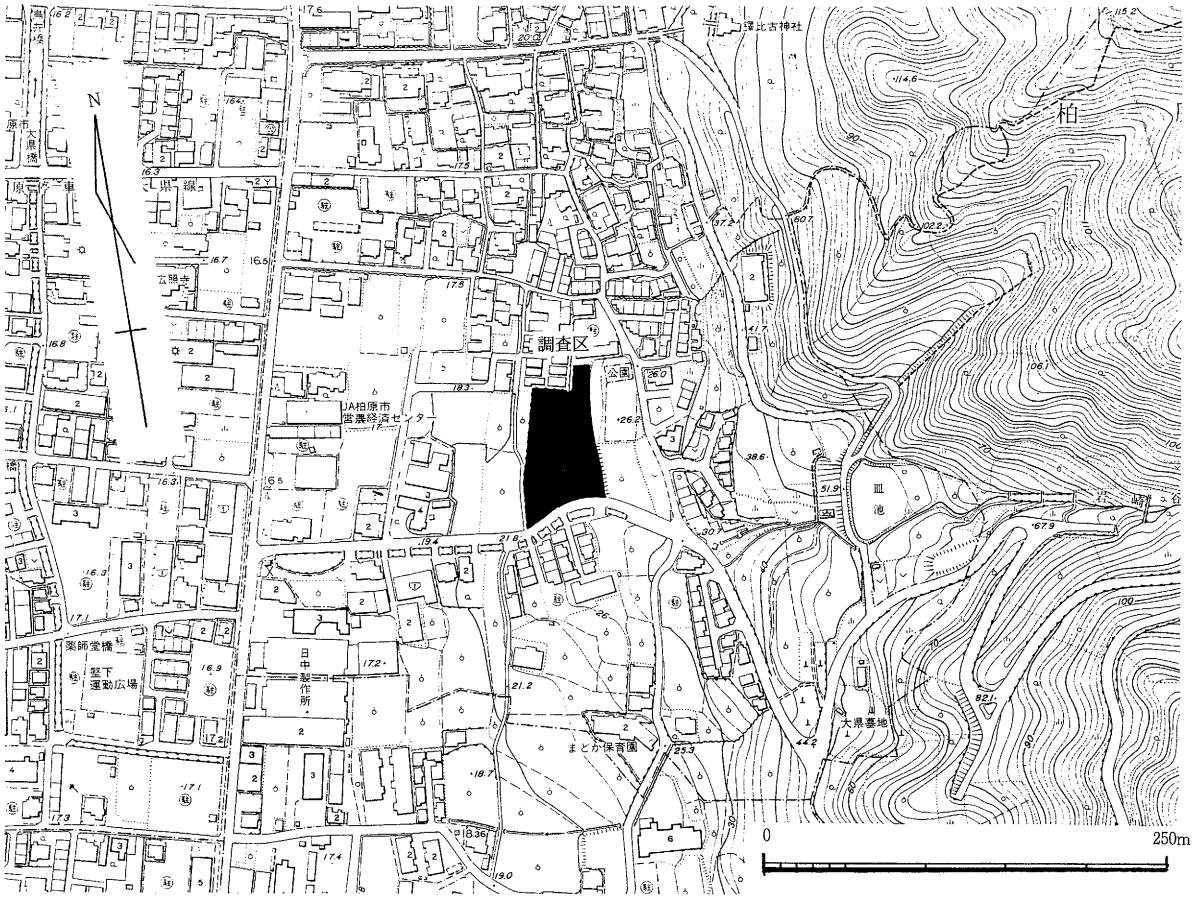
図－１　柏原市位置図

第２章　位置と環境

柏原市域は、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代に日本の歴史に重要な役割を果たした遺跡が沢山見られ、その後、飛鳥時代から奈良時代、中世、近世にも歴史的な出来事や遺産を数えることができる。

古墳時代後期から大陸の仏教文化が伝来し、柏原市域の豪族や氏族が競って古代寺院を建立した。古代寺院を建立することは、財力や技術或いは皇族や強力な後楯となる氏族が必要で、この地域にその要素が備わっていたことになる。この時代を少し遡る周辺の遺跡によってその理由も垣間見られる。一つ目は、古墳時代後期の平尾山古墳群に代表される後期群集墳が生駒山地の丘陵上に密集して築造されている。古墳を築造した集団が藩居し当時の河内地域に活躍していたのである。また、二つ目はこの地域には金属器等生産に関わる工人や渡来人が生活した痕跡や関係する墳墓が各所に見られ、金属器や大陸からの先進的な技術の導入が行われたことを示している。

当該地は、大県南廃寺と大県南遺跡の遺跡範囲に入り、上述の遺跡の重複が見られる地区である。大県南遺跡には、鉄器生産工人やガラス工房を稼働させる集団が居住していたことが近年の調査事例から明らかになっており、その遺跡の中心部の最も安定した場所に大県南廃寺（山下寺）があり多数の瓦の出土している。近年、「山」「下」と記した墨書土器も出土しており、古くからこの地に山下という名称があったことを示している。

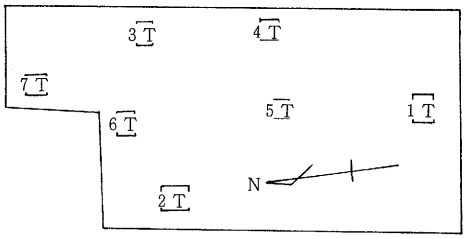


図－２　調査区位置図

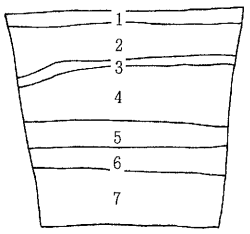
第３章　調査の概要

第１節　試掘調査

平成９年６月16日から同６月18日にかけて試掘調査を実施した。当該地は、南北方向に長い長方形の土地で第１トレンチは、南側中央部に設定した。南北2.3m、東西2.5m、深さ2.3mまで掘削した。地表下約0.2ｍは広場に使用するために入れた真砂土である。第２層も約0.3ｍの盛り土である。第３層は、約0.1ｍのぶどう畑の耕作土である。第４層は約0.6ｍの茶黄灰色砂質土ですぐ南側に流れる河川の堆積土である。第５、６層は、黄茶灰色砂質土と暗青灰色粘質土を合わせて約0.6ｍあり何れも遺物包含層である。その下層には10～50cm大の礫を多く含む緑青灰色粘質土がある。地山と考えられるが若干の遺物を含んでいた。第２トレンチは、北西側に設定した。第１～３層は、広場の整地層で約0.9ｍの厚さがある。第４層は、茶褐色粘質土でこの土層も盛土である。第５層は、約0.1ｍの腐食土で旧表土である。第６層は青灰色砂質土で耕作土である。第７、８層は薄茶青灰色粘質土、黄茶灰色粘質土で合わせて約0.5m遺物包含層である。第３、４トレンチは、東端部に設定した。何れのトレンチも真砂土の下層は茶褐色砂質土と黒茶褐色砂質土の地山である。この部分は、後世の削平によって消滅しているのであろう。第５、６トレンチは、第３、４トレンチの西側で調査区の中央部に設定した。第５トレンチは、第１層は真砂土で、その下層は地山であった。南側へ落ち込む土坑を検出した。土坑端部には杭が打ち込まれていた。時期は新しい様相であった。このトレンチでは遺物包含層は確認されなかった。第６トレンチは、西側方向に急激に落ち込む変換点を確認した。第２層は灰褐色粘質土、第３層茶灰褐色粘質土である。第４層は茶褐色砂質土で遺物包含層である。上層から約１ｍで地山を確認した。第７トレンチは、最北端に設定した。第1層は真砂土、第２、３層何れも盛土で上層から約0.4ｍを測る。第４層灰褐色粘質土は耕作土であろう。第５層灰青色粘質土、第６層茶黄灰色砂礫土は合わせて約0.4ｍの厚さを計り遺物包含層である。

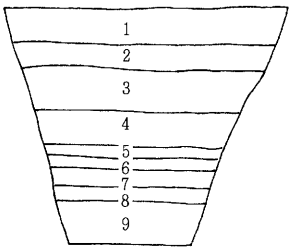


図－３　トレンチ位置図



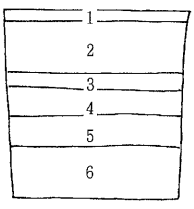
1．盛土
2．盛土
3．旧表土
4．茶黄灰色砂質土
5．黄茶灰色砂質土
6．暗青灰色粘質土
7．緑青灰色粘質土

図－４　第１トレンチ断面図



1．盛土
2．盛土
3．盛土
4．茶褐色粘質土
5．腐食土
6．青灰色砂質土
7．薄茶青灰色粘質土
8．黄茶灰色粘質土
9．緑青灰色粘質土

図－５　第２トレンチ断面図



1．盛土
2．盛土
3．白灰色砂質土
4．灰褐色粘質土
5．灰青色粘質土
6．茶黄灰色砂礫土

図－６　第７トレンチ断面図

第２節　調査の概要

今回の調査は、仮称健康福祉センターの建設に伴う事前の発掘調査で建物の建設位置に調査区を設定した。北側に南北方向11m、東西方向10mの方形Ａ調査区を設けた。当調査区で検出した遺構は、古墳時代後期から奈良時代及び近世以降の溝２、土坑２とピット４がある。南側の調査区は、南北方向50m、東西方向最大30mの幅を持つ1,500mである。北側西半部をＡ区調査区、同東半部をＢ区調査区、そして、南側をＤ区調査区と区画した。遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代から奈良時代にかけての土師器、須恵器、鍛冶関係遺物の鉄滓、鞴羽口、砥石や瓦、サヌカイト石器などがコンテナバット72箱あり、近代の飛行機に付随する部品も古墳時代からの溝や建物群、土坑、近代の格納庫跡等の遺構や遺物包含層から出土した。

調査区の概要と土層断面の概略を述べる。

Ａ区調査区の北側と西側断面を観察する。北側断面は、東側から西側にかけて緩く下向している。東側で約0.5ｍ、西側で約0.9ｍ深さを測る。基本土層は、第１層真砂土、第２層は旧表土の灰褐色土である。第３層は、灰茶色砂質土である。厚さ約0.2mを測り飛鳥時代以降の遺物包含層である。第４層は古墳時代以前の遺物包含層である。溝１の石列、溝２の断面が観察できる。南北方向の地山は、極僅かに南傾している。

Ｂ区調査区は、Ｃ区面より約１ｍの段差下にある西側平坦面である。地表下約２ｍで地山となる。北側が最も低く南側になるに従い1.4mまで高くなっている。基本土層は、第１層真砂土が約１ｍある。第２層黄茶褐色砂礫土、第３層茶灰色砂質土、第４層薄茶褐色砂質土、第５層暗灰青色砂質土である。第３層下層から遺物包含層で弥生時代から奈良時代にかけての時期が想定される。

Ｃ区調査区は、Ｂ区調査区の東側にあたり丘陵の上段にあたる。Ｃ区の西側には遺物包含層と遺構がよく遺存しており東端部のみ削平を受けている。上層の真砂土約0.1～0.2m除去した後茶灰色粘質土が拡がり、当調査区の南側で格納庫の痕跡を確認した。これは、八尾飛行場から運び込まれた飛行機の収納建物で基礎は綿密に整地し、土層はすべて削平を受けていた。

Ｄ区調査区は、最南端で深さ2.0～2.4mを測り調査区で最も深い。南側は谷筋で古墳時代以前の洪水によって１ｍを越す巨石を含めて多数の礫が雑多に散乱していた。主に谷上部の岩塊が流出したものであろう。東端部は撹乱が激しく７層位に分類される。西端部になると0.1m位の土層が平面的に重なり各遺構が重複している。それぞれ細かな時期設定は困難であるが、最下層の遺物包含層第７層から弥生土器や縄文土器の出土が見られたが、上層には古墳時代から奈良時代にかけての土器類が大部分を占めた。

第３節　遺構

溝１

溝は、 Ａ区調査区北側に検出した北東から西南西方向に真直ぐ伸びた近代の溝である。規模は、長さ11.0m以上、幅1.5m、深さ0.4mを測る。埋土は、茶褐色砂質土で、中央部には溝又は暗渠として利用された石組みが遺され、東側になるに従い検出面も浅いので石の遺存が悪くなっている。

石は、大きさ20～100cmを測り花崗岩や自然円礫を使用している。溝に直行するように南側へ伸びている部分があり、石組みの状況から同一の性格の溝で約1.5mの場所で途切れている。出土遺物は、近代の瓦や陶磁器類があった。

溝2

溝2は、A区調査区の西側にあり、ほぼ南北方向に伸びた古墳時代後期以降の溝である。南端部は途切れており、端部は南西方向に折れ曲がる。溝の傾斜は北側に下向し、規模は、長さ11.0m、幅約0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は薄茶灰色砂質土である。この溝の東側は傾斜があり、西側にはピットや土坑等の遺構が多くあり区画性のある溝である。細片の土師器、須恵器が多く時期は明確でないが古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

溝3

溝3は、B区建物2の南側に検出した細い溝である。建物2と同一方向に伸びる長さ1.6m、幅0.2mの溝である。時期は、建物2と同一時期ではないかと考えられる。

溝4

溝4は、B区東端に石垣に平行して北側方向に下向して伸びる溝である。長さ4.4m、幅0.8mの溝である。溝から遺物の出土がなく時期が不明である。断面観察で見ると新しい時期に対応する。

溝5

溝5は、B区中程に土坑3の南西隅から南西方向に伸び西側へ屈曲した溝で長さ2.0m以上、幅0.5mの溝である。

溝6

溝6は、B区中程に検出した東西方向に伸びた長さ6.0m、幅0.5mの溝である。田又は畑の区画溝の可能性が高く新しい時期の溝である。

溝7

溝7は、C区北側の建物1の北東隅から西側へ真直ぐ伸びた溝である。土坑8より溝6方向へ伸びる溝で新しい時期の区画性がある。

溝8

溝8は、建物1の西側に南北方向に伸びた溝7より新しい時期の溝である。長さ7.5m、幅0.6mの溝である。

溝9、11、12、13

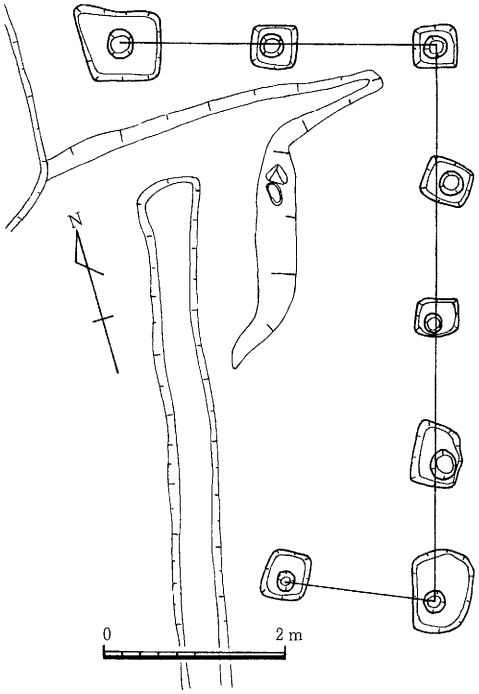
溝9は、長さ5.0m、幅0.3m、溝11は、長さ3.8m、幅0.3m、溝12は溝11と平行する長さ4.5m、幅0.3m、溝13は東西方向で長さ2.3m、幅0.3mの溝である。時期は新しい時期の溝である。

溝10

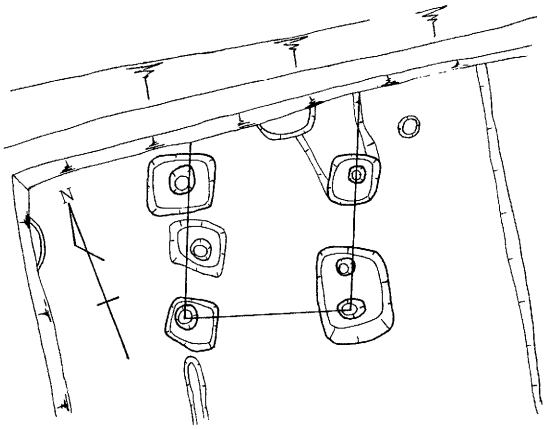
B区南側で検出した東西方向であり、建物4、5と建物6の間にあり、細片であるが土器類が多く含まれている。長さ4.0m、幅0.8mの溝である。

溝14

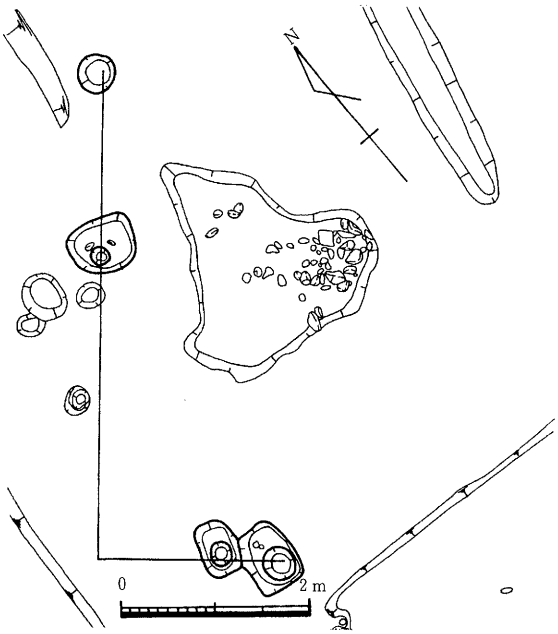
溝14は、溝10と同様土器の混入があり長さ6.5m、幅0.6mである。時期は飛鳥時代であろう。



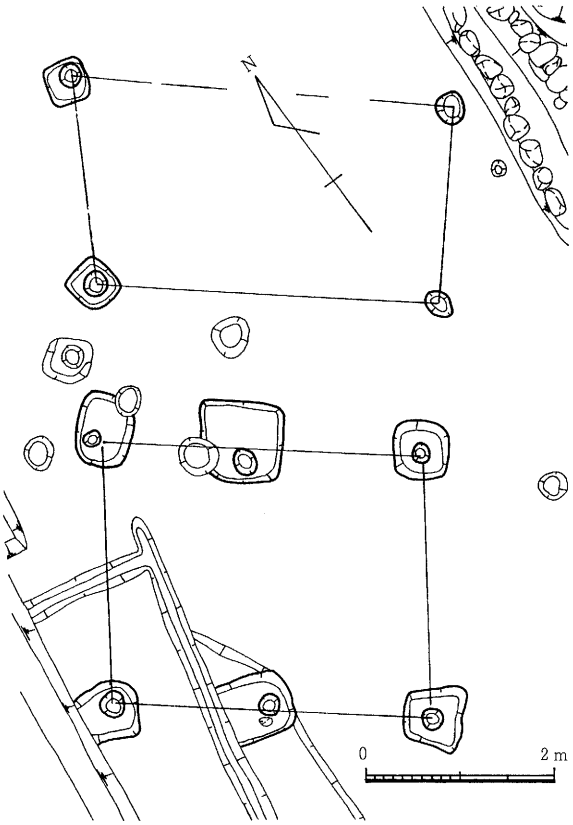
図－7　建物1



図－8　建物2



図－9　建物3



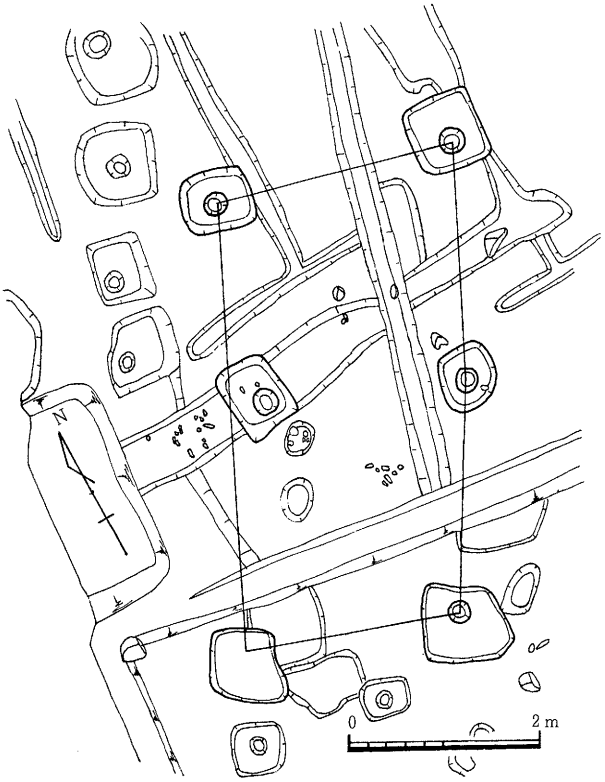
図－10　建物4、5

溝15

溝15は、南半部から検出した長さ4.7m、幅0.2～0.6mの溝で北東から南西に向く。時期は、飛鳥時代以降と考えられる。

建物1（図－7）

C区北側部に検出した建物で、北側と東側、及び南側の一部が遺存して西側と南側の一部が後世の遺構（溝）で削平を受けている。立地は、東側から西側へと南側に緩く傾く斜面地に建てた東西方向2間、南北方向4間の建物である。東西方向の柱間は、北側3.5m（1.68、1.80m）、南側推定



図－11　建物６

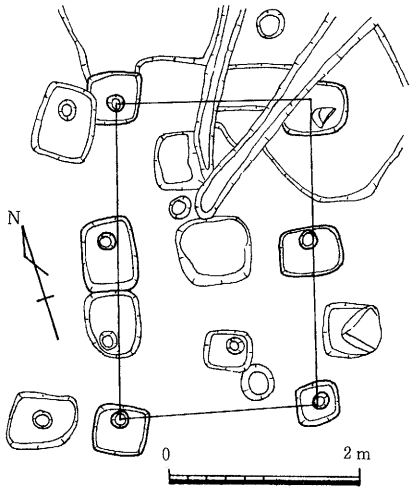
3.36m（16.8m）、東側の南北柱間は6.14cm（北側から1.50m、15.4m、1.60m、1.5m）である。磁北は、N－17.5°－Eである。

建物２（図－８）

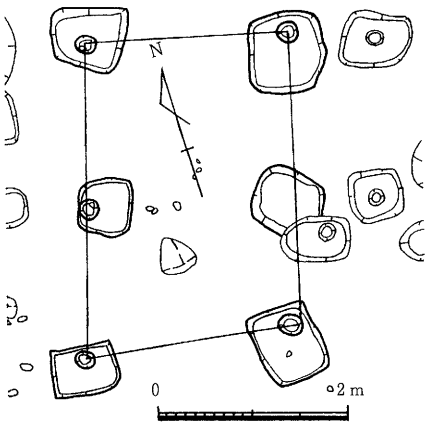
B区北側部に検出した建物で、北側と東側、及び南側の一部が遺存して西側と南側の一部が調査範囲外へ続いていると考えられる。立地は、東側から西側へと南側に緩く傾く斜面地に建てた東西方向２間以上、南北方向２間以上の総柱建物である。東西の柱間は、１.90m、1.76m、南北方向には北側から14.8m、1.48mである。磁北は、N－23.5°－Eである。

建物３（図－９）

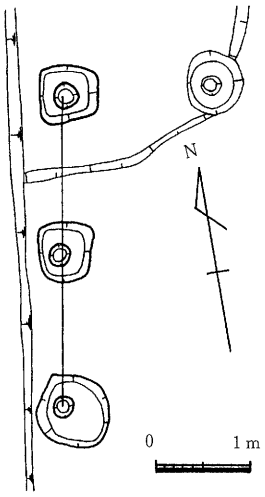
C区中央部に検出した建物で、西側と南側の一部が遺存して他は後世の遺構（溝や土坑）で削平を受けている。立地は、東側から西側と南側へと緩く傾く斜面地に建てた東西２間以上、南北３間以上の建物である。東西間隔は、2.0m、南北間隔5.33m（北側から2.0m、1.58m、1.75m）である。磁北は、N－41.0°－Eである。



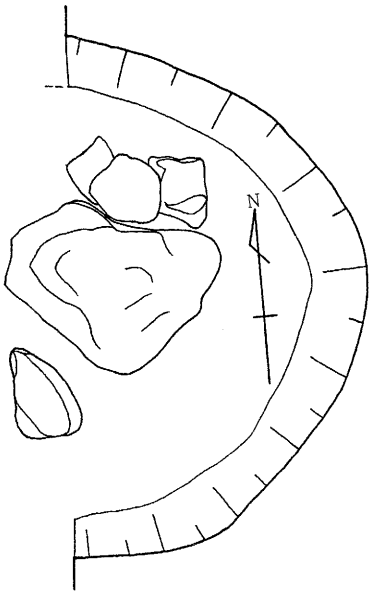
図－12　建物７



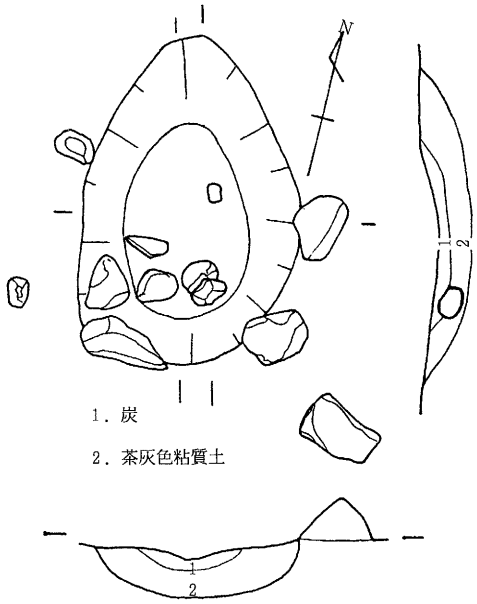
図－13　建物８



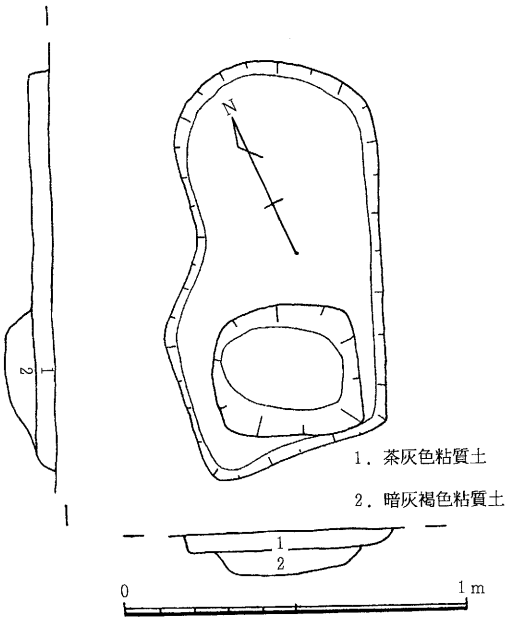
図－14　建物９



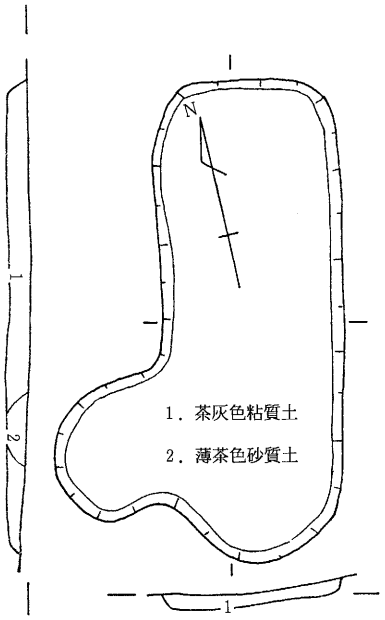
図－15　土坑11



図－16　土坑14



図－17　土坑17



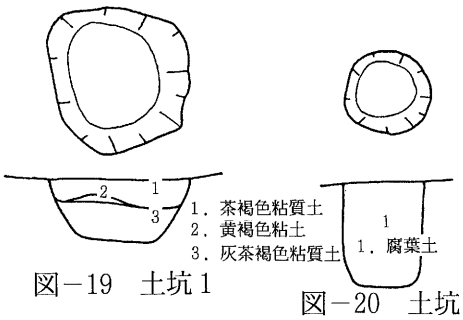
図－18　土坑18

建物４（図－10）

Ｂ区中央部に検出した建物で、東西１間、南北１間の建物である。東西4.06m、3.64m間隔は、南北2.20m、2.10mである。磁北は、Ｎ－39.0°－Ｅである。

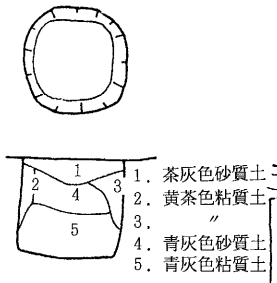
建物５、６（図－10、図－11）

建物５は、Ｂ区南側部に検出した建物で東西２間、南北１間の建物である。東西方向北側柱間は3.50m（1.58m、1.92m）、南北柱間3.58m（1.75m、1.83m）、南北間は2.83m（2.83m、2.83m）である。磁北は、Ｎ－39.0°－Ｅである。後者は、東西１間、南北２間の建物である。東西柱間は2.67m、2.25m、2.42m、南北柱間は西側23.0cm（2.25m、2.75m）、東側5.16m（2.58m、2.58m）である。磁北は、Ｎ－26.0°－Ｅである。

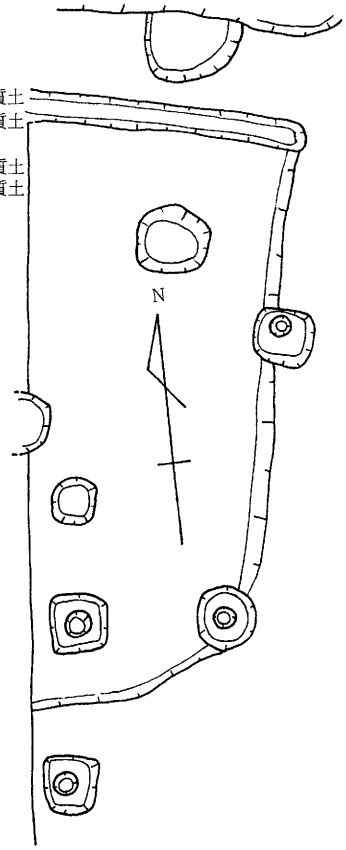


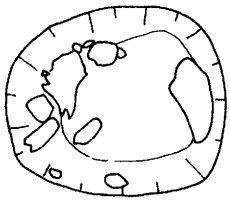
図－19　土坑１

図－20　土坑８

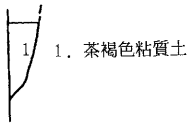


図－21　土坑４

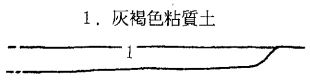




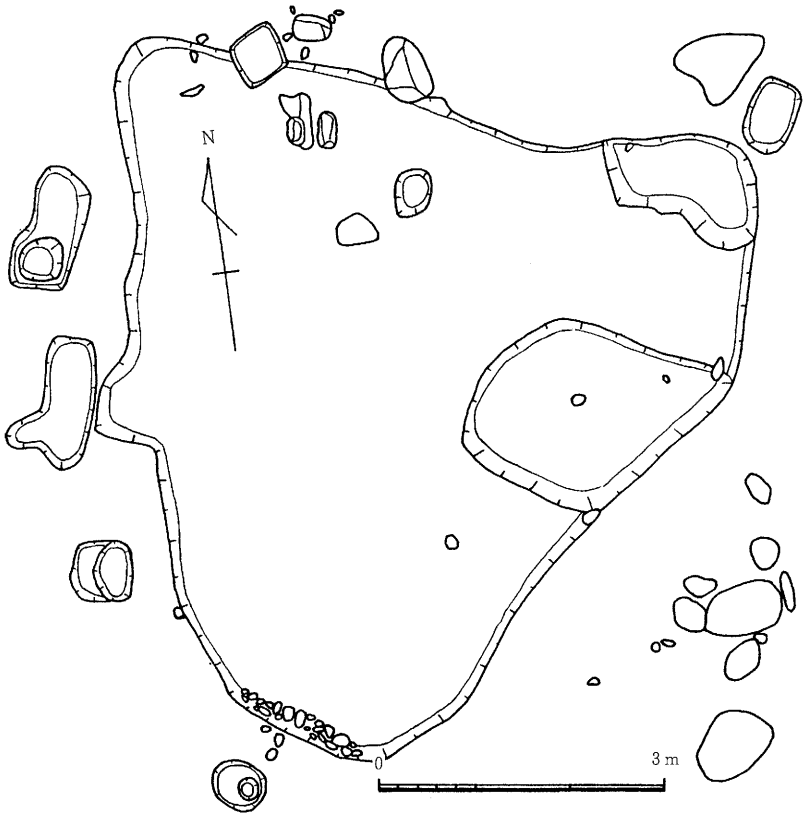
図－22　土坑10



図－23　土坑15



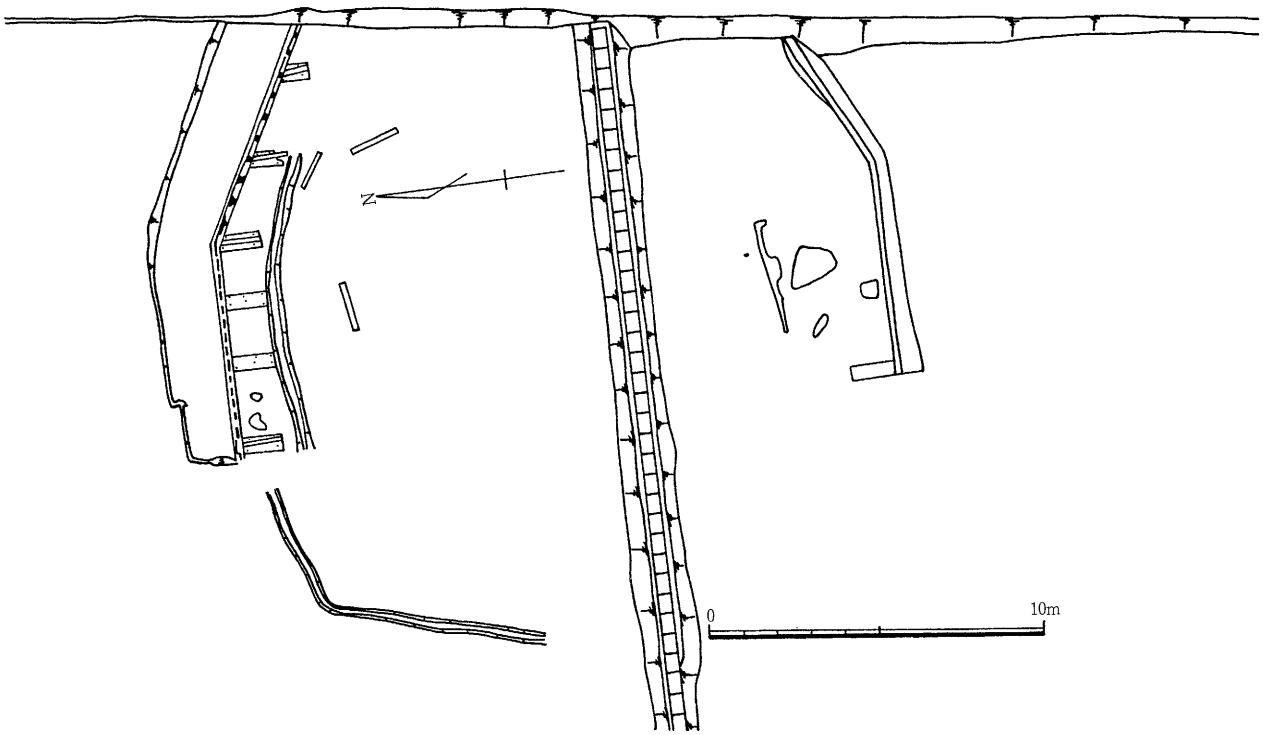
図－24　土坑12、13、16



図－25　土坑19

建物７、８（図－12、図－13）

Ｂ区南側部に検出した建物で東西１間、南北２間の建物である。前者は、東西柱間は2.17m、2.25



図－26　格納庫跡

m、2.25m、南北柱間は西側3.42m（1.5m、1.92m）、東側3.25m（1.5m、1.75m）である。磁北は、N－17.0°－Eである。後者は、東西柱間隔は、2.25m、2.33m、2.3m、南北柱間は西側3.5m（1.83m、1.67m）、東側3.25m（1.83m、1.42m）である。磁北は、N－15.5°－Eである。

建物9（図－14）

D区南側部に検出した東西は1間以上、南北方向2間の建物である。東西方向の柱間隔は不明で、南北柱間は3.46m（北側から1.79m、1.67m）である。磁北は、N－10.0°－Eである。

土坑（図－15～25）

今回の調査区で不定形で規模が大きな掘込みの土坑は4基検出した。円形又は隅丸方形のやや規模が小さな土坑（3、10、11、13、17、18）と不定形で規模が大きな土坑（12、15）がある。前者は、底部が平らなもの（3）とそうでないものがある。底部に人頭大の石を敷き詰めたもの（3、11)、遺物を多量に含んだもの（7、9）など各種の土坑がある。土坑3は、建物1の北西側に位置しこの建物の利用されていた期間に廃棄された遺物の可能性がある。遺物の種類は生活に使用した各器種がある。

格納庫（図－26）

今回の調査で検出した近代の格納庫跡である。上部の痕跡はなく、基礎部分だけが遺存していた。基礎はコンクリート製でボルト・ナットを使用して木製の柱などを組上げていたのであろう。この建物を築造する際約1m以上の掘削が行われている。埋土や周辺部の撹乱土から飛行機の各種部品と考えられる残片が出土した。これらの部品について陸上自衛隊八尾駐屯地の今泉里司氏から有益な御教示を頂いたがなんらかの形でさらに明確にしていきたいと考える。

第４節　遺物

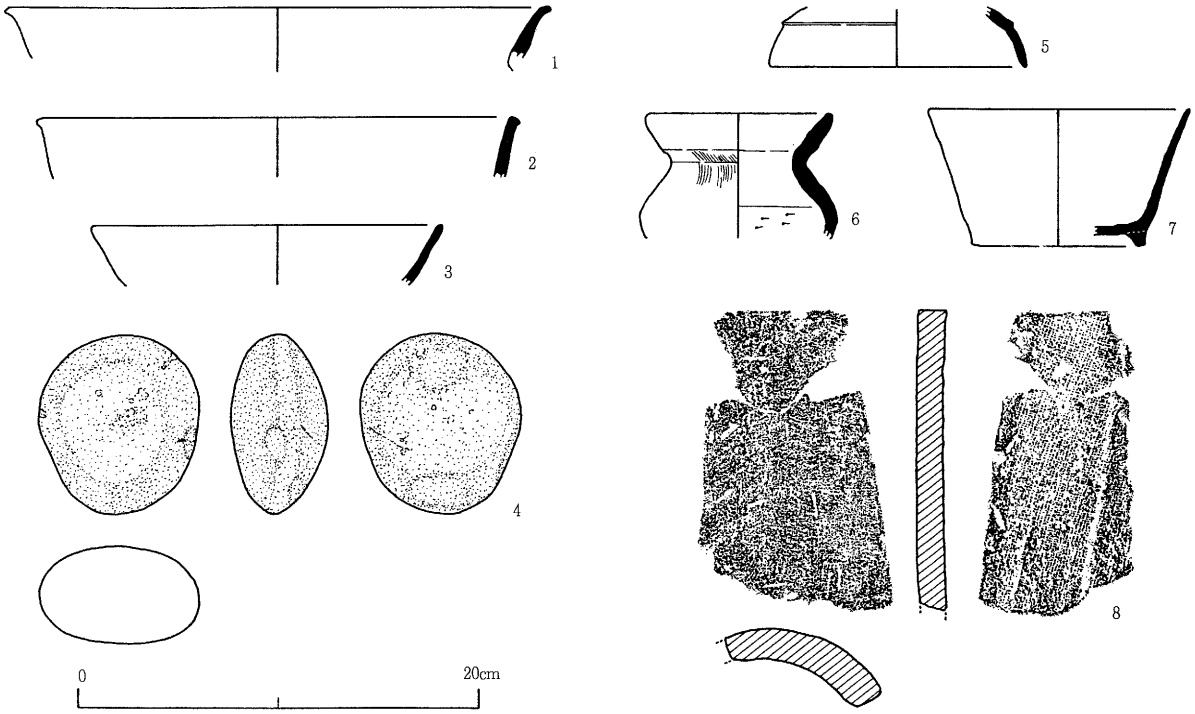
今回の調査区から縄文時代の土器、弥生時代の土器や石器、古墳時代土師器、須恵器、鉄滓、鞴羽口、埴輪、飛鳥時代の土器類と瓦などコンテナ72箱の出土があった。また、近代の戦闘機の部品も採集した。以下検出した遺構内の遺物を中心に説明を加えたい。

溝出土遺物（図－27）

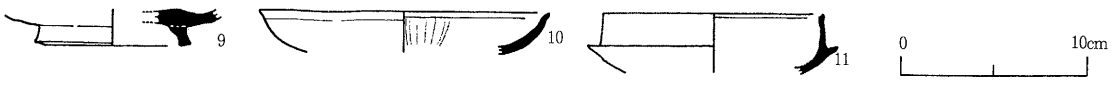
（1•2）は土師器鍋の口縁部。外方に広がる口縁部に、口縁端部は外折する。（1）溝１。（2）溝４。（3•7）は須恵器杯身。直線的に外方に広がる口縁部、口縁端部は丸くおさめる。溝１　。（7）は高台をもつ。溝３　。（4）は敲打痕が残存し、敲き石と見られる。長8.95cm、幅8.1cm、厚4.9cm、重461.1g。溝13。（5）は須恵器杯蓋。外方にひらく口縁部、口縁端部は段をもたない。口縁部と天井部境の稜はにぶい。溝15。（6）土師器小型壺。「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。外面体部ハケ目（９本／cm）、内面横方向のヘラケズリ調整を施す。大溝。（8）は丸瓦。凸面には平行タタキのち板ナデ調整を施し、凹面には布目痕が見られる。溝２　。

建物出土遺物（図－28）

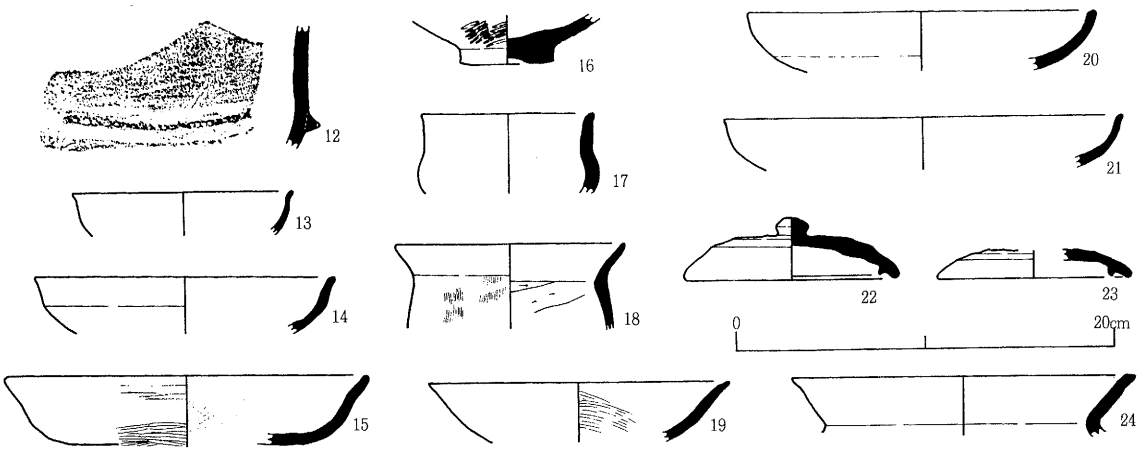
（9・11）は須恵器杯身。（9）は「ハ」の字形にひろがる断面台形の高台をもつ。建物３。（11）の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は内へ傾斜する。受部は外上方にのびる。建物５。（10）は土師器杯身。内面に放射線状暗文を施し、外面は風化のため詳細不明。建物３。



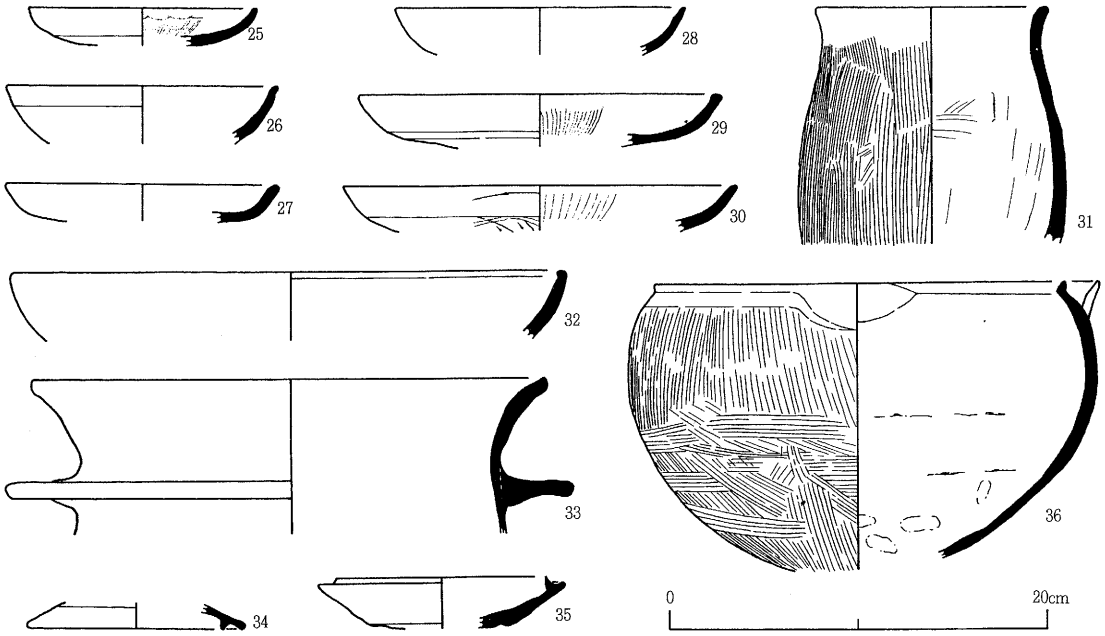
図－27　溝出土遺物



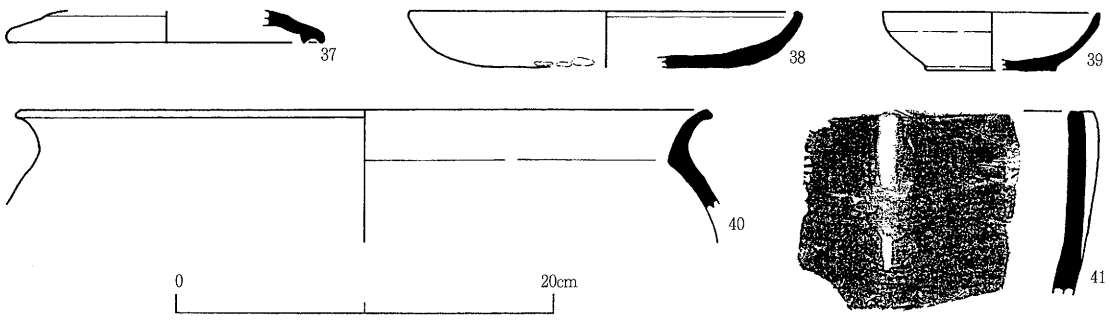
図－28　建物出土遺物



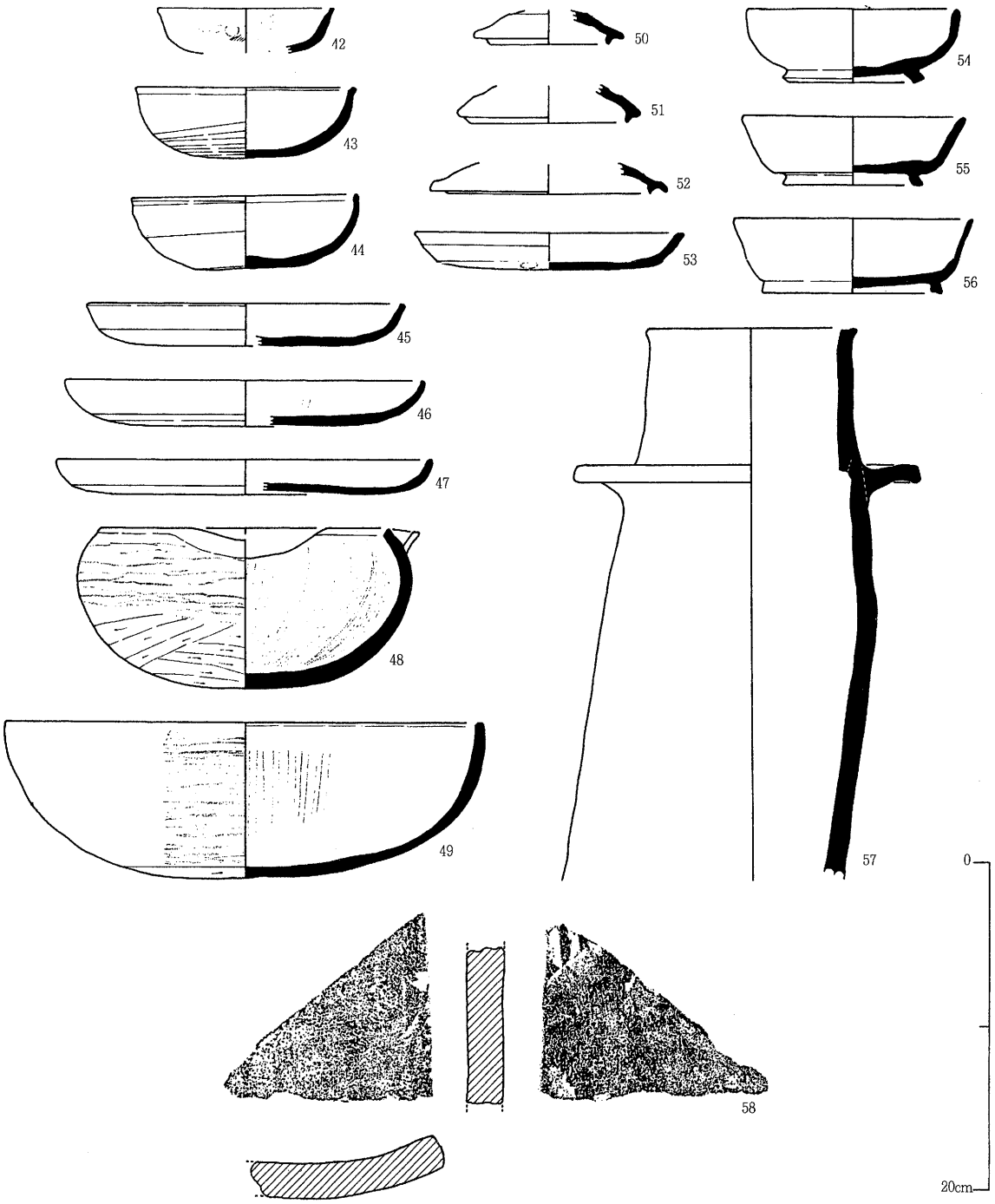
図－29　ピット出土遺物



図－30　土坑７出土遺物



図－31　土坑出土遺物



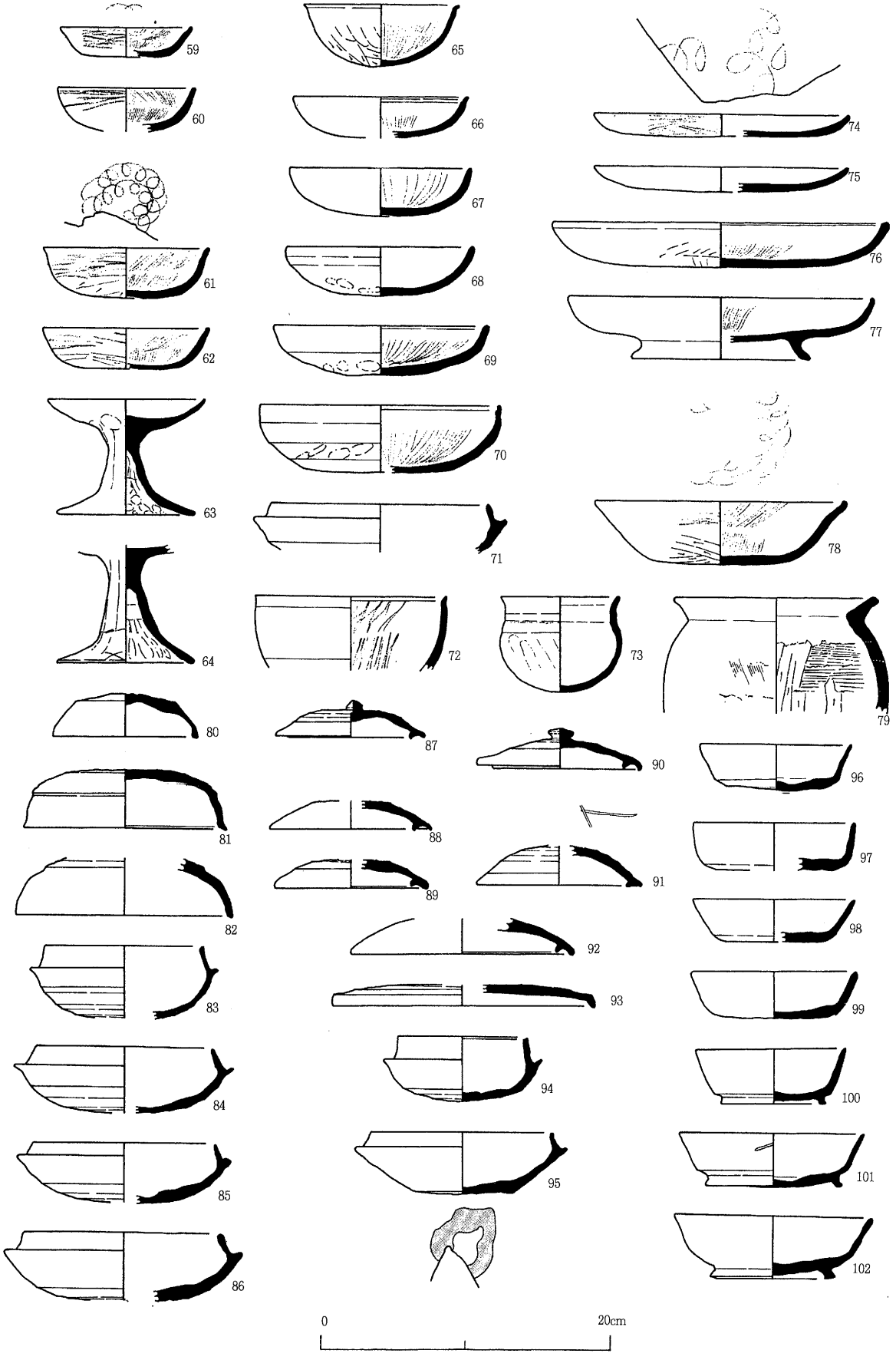
図－32　土器溜り出土遺物

ピット出土遺物（図－29）

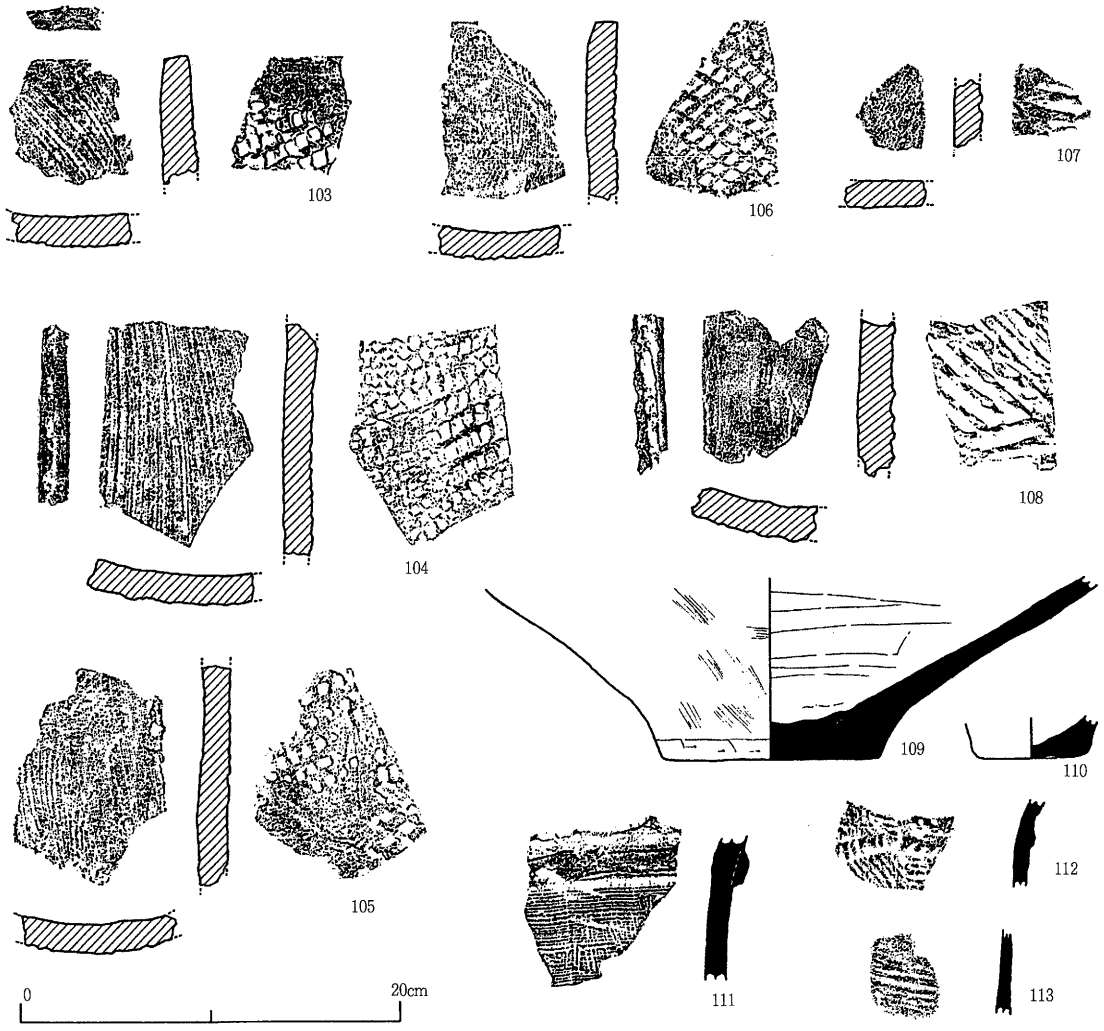
（12）は縄文土器深鉢。体部に刻目凸帯をもち、その直下に横方向のヘラケズリ調整を施す。（16）は弥生土器甕。外面体部にタタキ目を施す。（13•14•15•20）は土師器杯身（15）は内面密な放射線状暗文、外面にはヘラミガキ調整を施す。（17）は小型壺。（18～20）は甕。（18）は外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整を施す。（21）は皿。（22•23）は須恵器杯蓋。天井部に宝珠つまみをもつ。

土坑７（図－30）

土師器杯身・皿・甕・鉢、須恵器杯蓋・杯身が出土した。（25～30）は土師器杯身。内面に２段、



図－33　包含層出土遺物その１



図－34　包含層出土遺物その２

または１段の暗文を施し、外面にヘラミガキやヘラケズリ調整を施す。(31) は甕。外面ハケ目調整、内面工具痕が見られる。(36) は鉢。外面ハケ目調整を施し、口縁部は片口。(34･35) 須恵器杯身・杯蓋。(35) の口縁端部はわずかに内傾させ形骸化する。

土坑出土遺物（図－31）

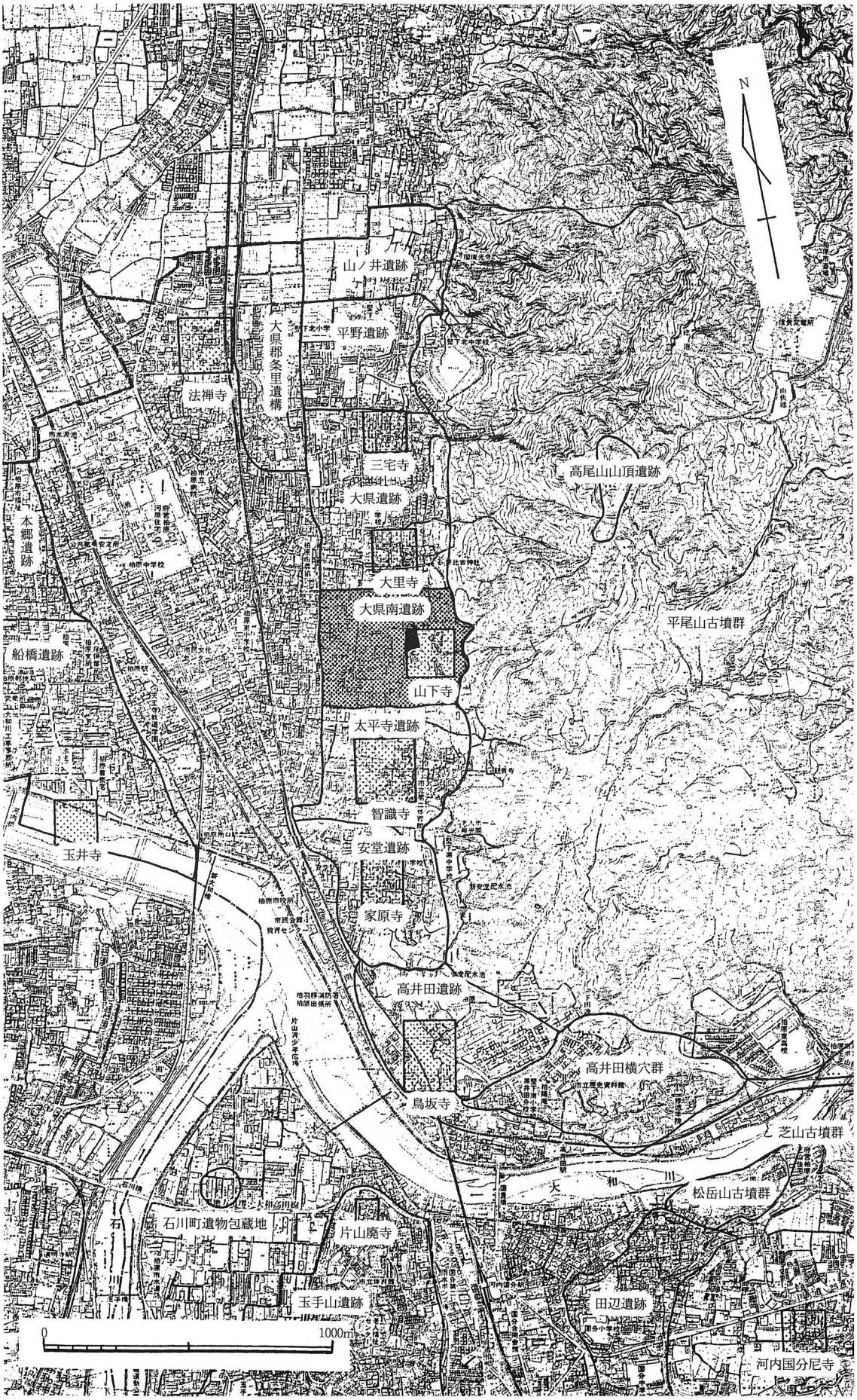
(37) 須恵器杯蓋。口縁端部とかえりは直線上におかれる (39) 須恵器杯身。平らな底部をもち、浅い椀形を呈する。(41) 輪花状円形火舎。内外面に密なヘラミガキ調整、外面には菊花文の型押しが見られる。土坑２ (37) 、土坑３ (38)、土坑４ (39・41)、土坑９ (40)

土器溜まり（図－32）

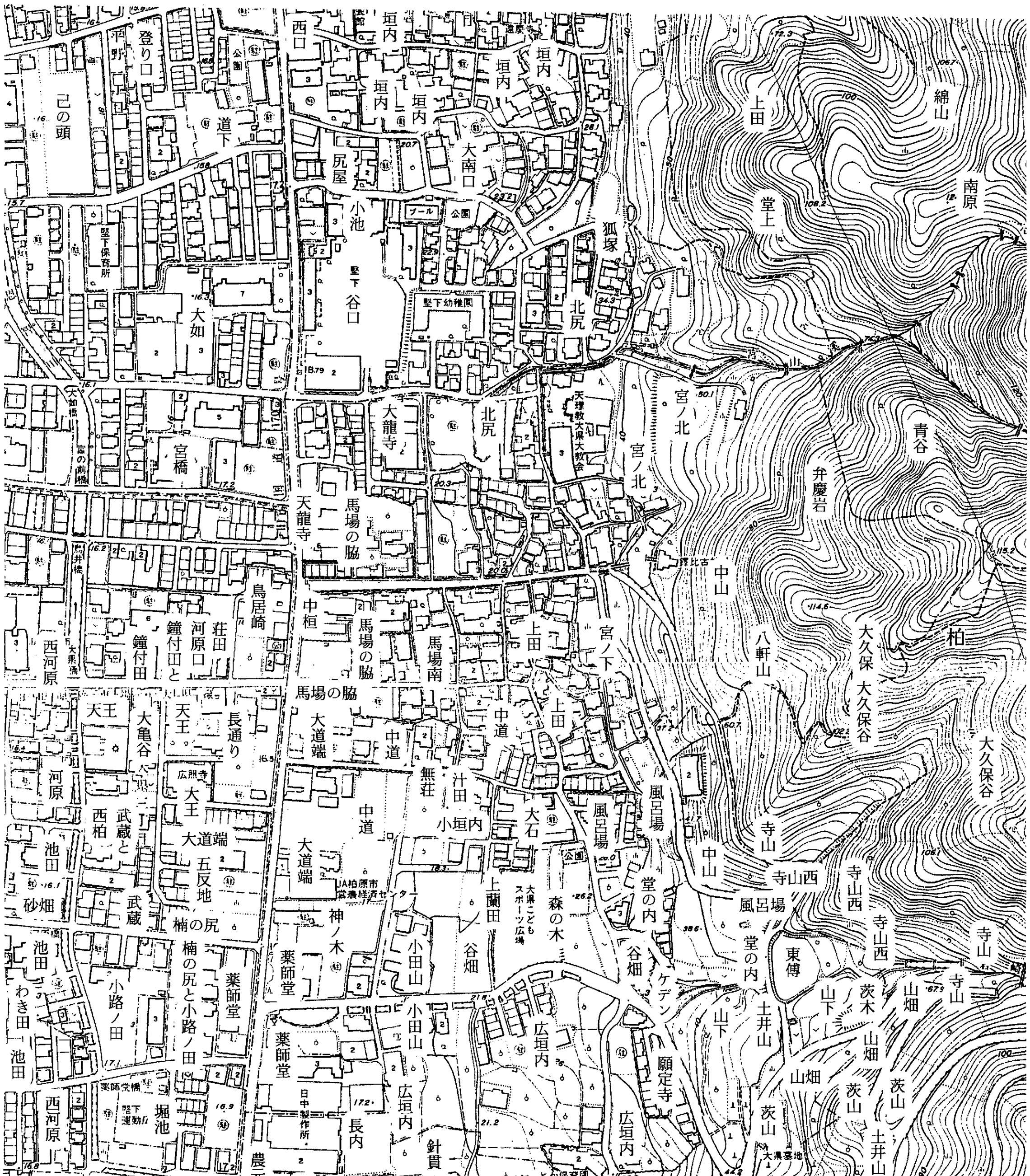
土師器杯身・皿・鉢・羽釜、須恵器杯蓋・杯身、平瓦が出土した。杯身内面には放射線状暗文を施し、甕・鉢の外面には密なハケ目調整が見られる。包含層（図－33･34）縄文土器、弥生土器、埴輪、土師器杯身・高杯・小型壺・甕、須恵器杯蓋・杯身・平瓦などが見られる。(112) は波状口縁をもつ深鉢。(109) は壺底部。(111) は円筒埴輪。(95)の須恵器杯身の外面底部に施朱が見られる、(88・91) の杯蓋の外面天井部に列点文と線刻が見られる。土師器杯身・皿には放射線状・螺旋状暗文・ヘラケズリ調整などが施される。

図　　版

図版一　調査地位置図

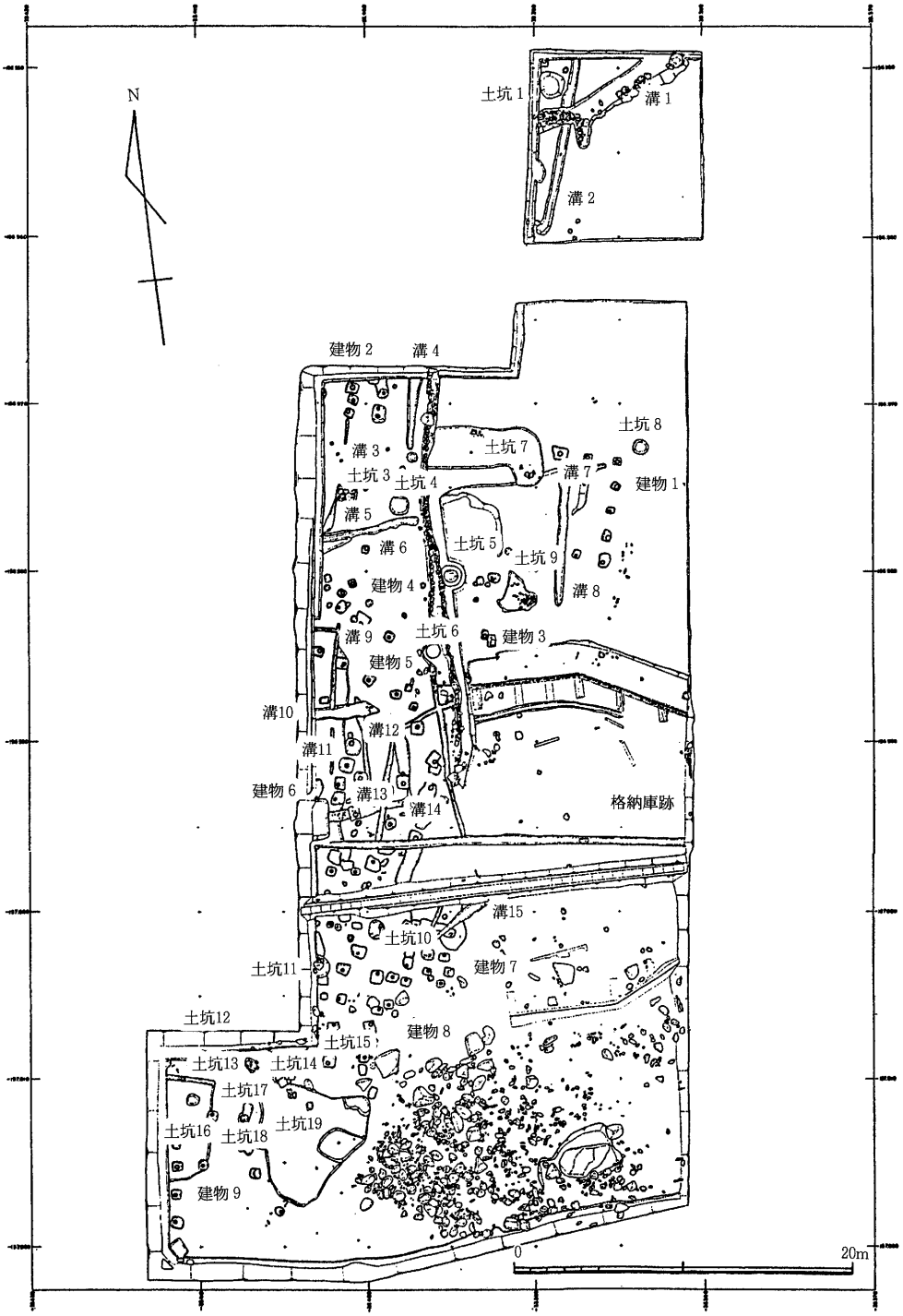

N
山ノ井遺跡
平野遺跡
大県郡条里遺構
法禅寺
三宅寺
大県遺跡
高尾山山頂遺跡
本郷遺跡
大里寺
大県南遺跡
平尾山古墳群
船橋遺跡
山下寺
太平寺遺跡
智識寺
玉井寺
安堂遺跡
家原寺
高井田遺跡
高井田横穴群
鳥坂寺
芝山古墳群
大和川
松岳山古墳群
石川町遺物包蔵地
片山廃寺
玉手山遺跡
田辺遺跡
河内国分尼寺
0
1000m

図版二　字名図

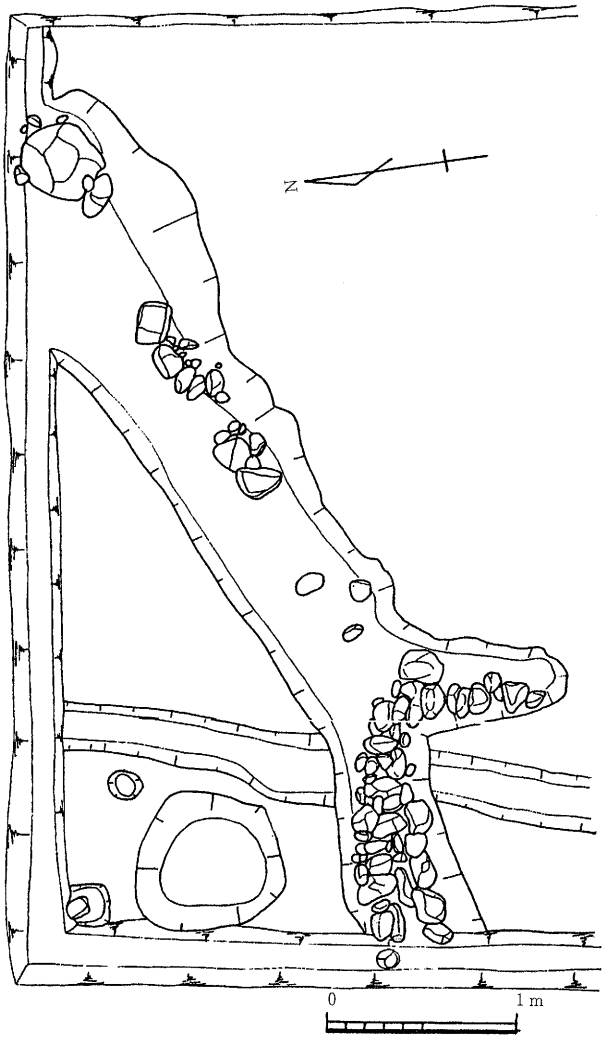


西口
垣内
登り口
己の頭
道下
大南口
尻屋
小池
堅下谷口
狐塚
北尻
上田
堂上
綿山
南原
大如
宮ノ北
大龍寺
宮橋
天龍寺
馬場の脇
青谷
弁慶岩
鳥居崎
中垣
馬場南
宮ノ下
中山
八軒山
大久保
大久保谷
柏
西河原
鐘付田
河原口
荘田
天王
大亀谷
長通り
大道端
中道
汁田
無荘
小垣内
大石
風呂場
寺山
寺山西
池田
砂畑
武蔵
西柏
五反地
楠の尻
神ノ木
上蘭田
谷畑
森の木
堂の内
東傳
わき田
小路ノ田
楠の尻と小路ノ田
薬師堂
小田山
広垣内
ケデン
土井山
山下
山畑
茨木
願定寺
茨山
堀池
農元
長内
針貫
廣垣内
芦田
芥田
角上
横石
三反田
東小田
出口
上品
長嶋
餞地
喜増
大田
新地
角上東
山下
熊野田
所田
北浦田
福諸
通塚
観成寺
長田
大神宮
西垣内
立花垣内
築場
片原
原田
茶園
河原口
地蔵前
馬場
柿添
寺ノ庭
塚の敷
門口
金ツキ堂
寺ノ下
上畑と
上畑
焼山
奥山

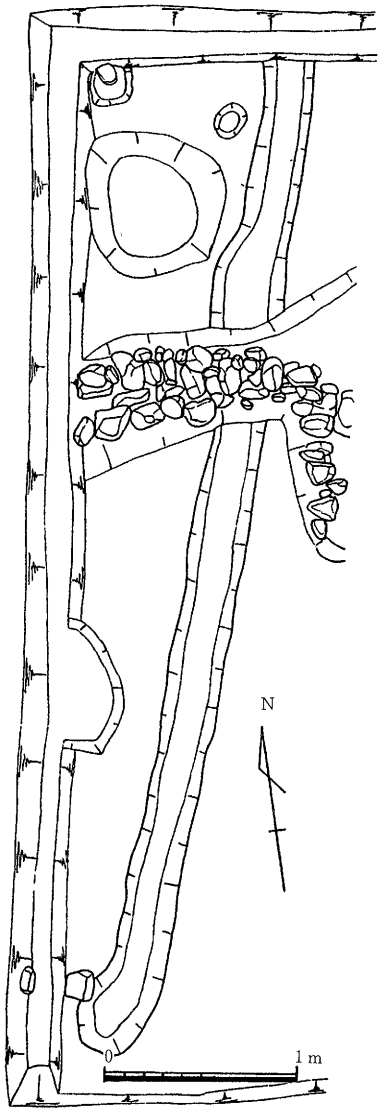
図版三　遺構概略図


N
土坑 1
溝 1
溝 2
建物 2
溝 4
土坑 8
溝 3
土坑 7
溝 7
建物 1
土坑 3
土坑 4
溝 5
溝 6
土坑 5
土坑 9
建物 4
溝 8
溝 9
土坑 6
建物 3
建物 5
溝10
溝12
溝11
建物 6
溝13
溝14
格納庫跡
溝15
土坑10
土坑11
建物 7
土坑12
建物 8
土坑15
土坑13
土坑14
土坑17
土坑16
土坑18
土坑19
建物 9
0
20m

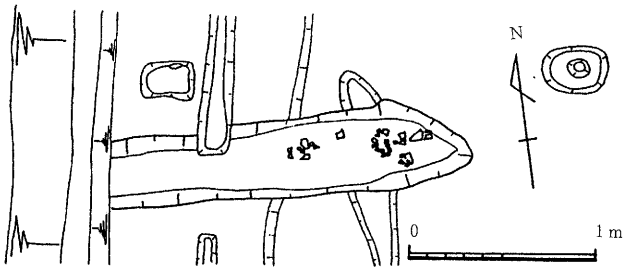
図版四　溝一、二、十、十四



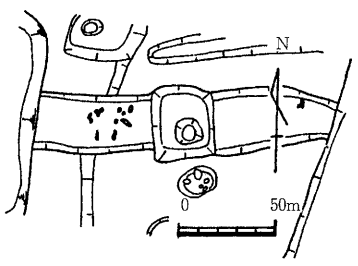
溝 1



溝 2

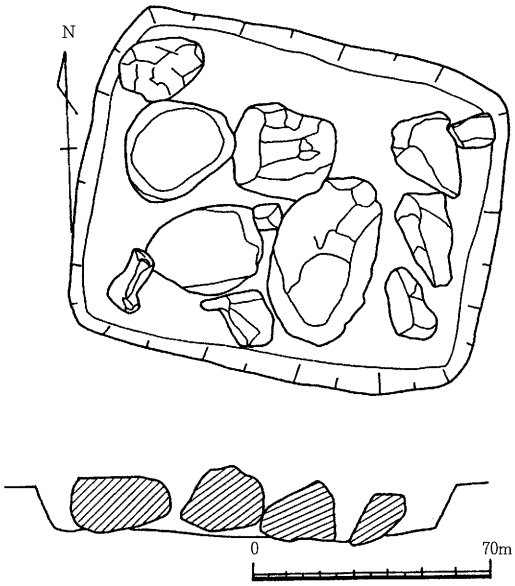


溝10



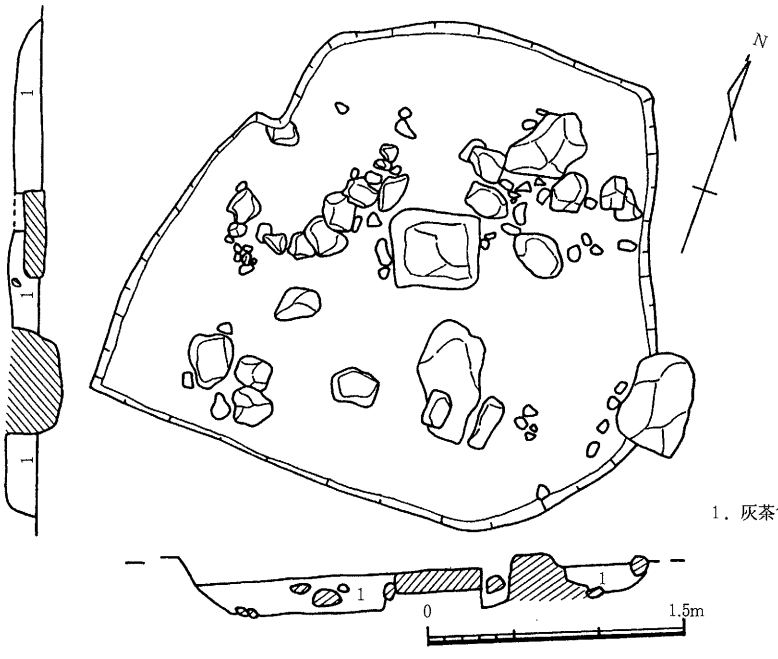
溝14

図版五　土坑三、九、二十



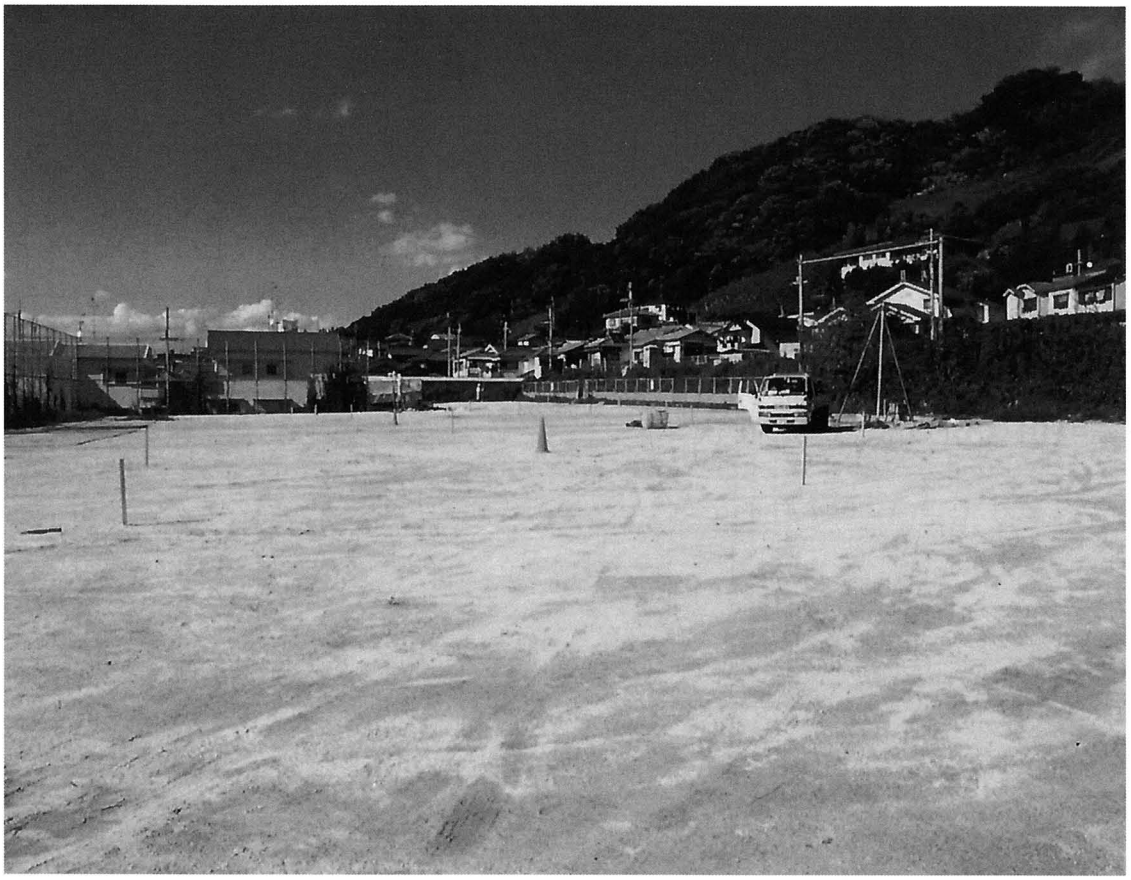
土坑3

土坑9



土坑20

図版六　調査前風景（南側から）同（北側から）



南側から

北側から

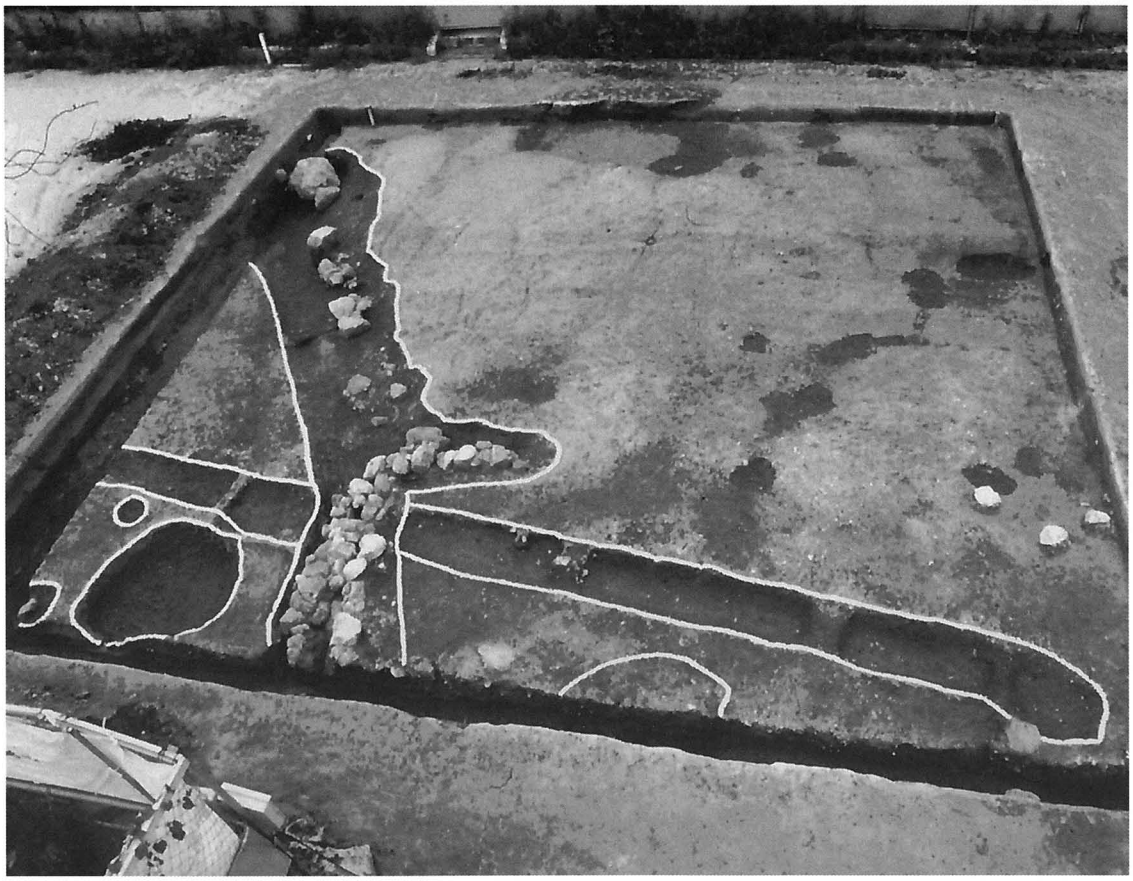
図版七　調査区北半部・調査区南半部（航空写真）

調査区北半部

調査区南半部

図版八　試掘調査第七トレンチ　A区調査区（西側から）

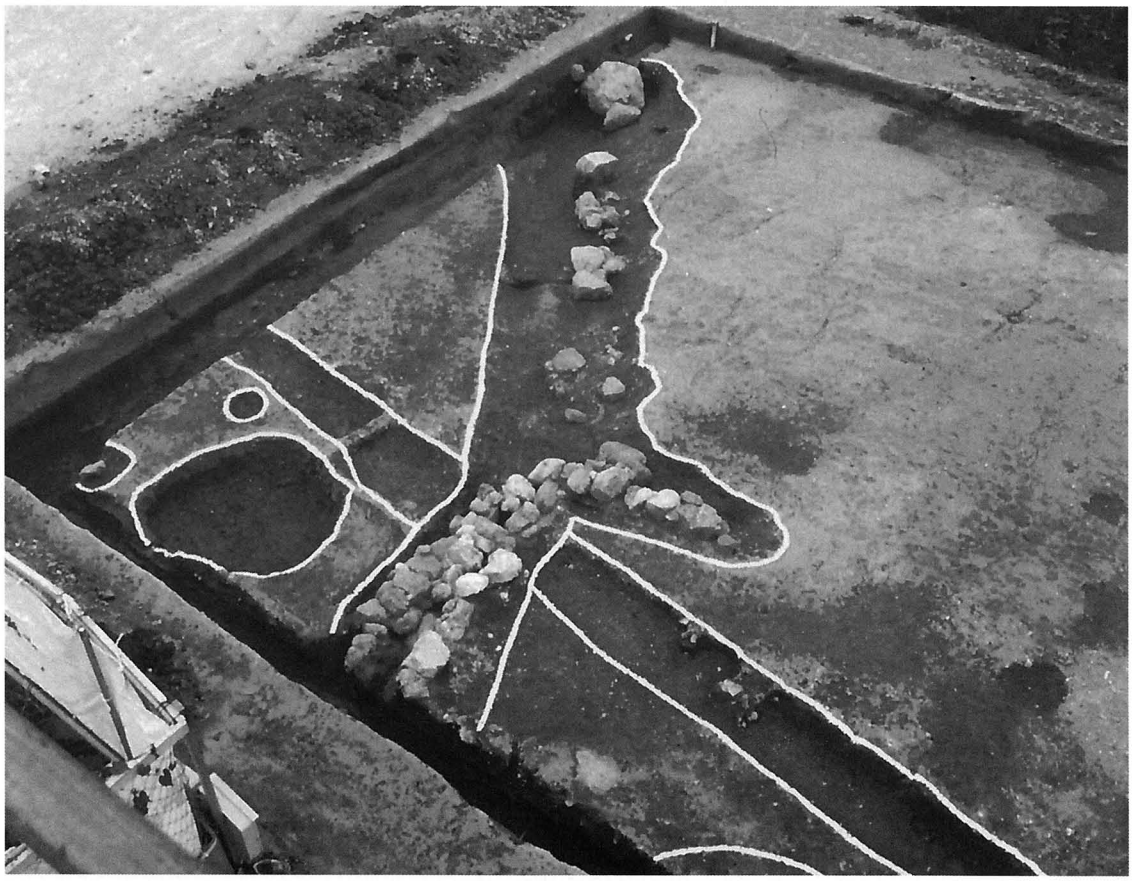
第七トレンチ



A区調査区（西側から）

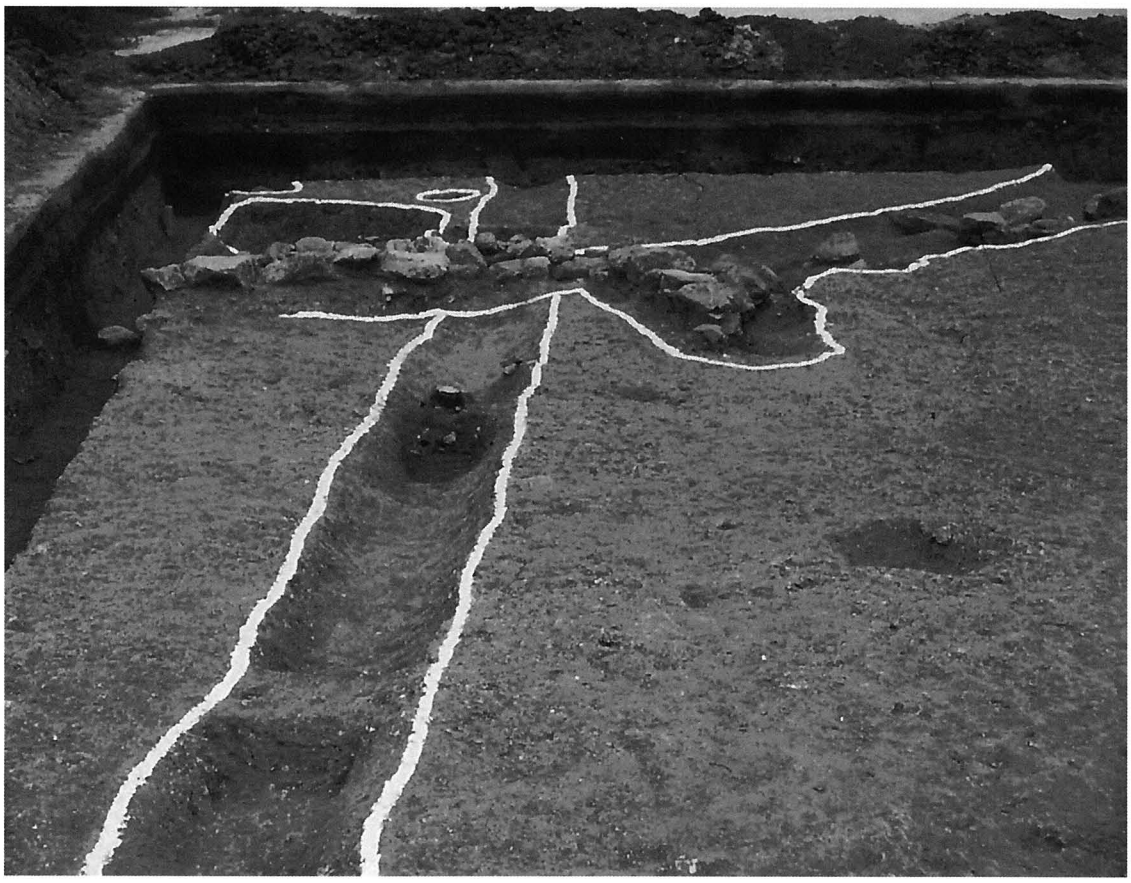
図版九　A区調査区（南側から）　溝一

A区調査区（南側から）



溝1

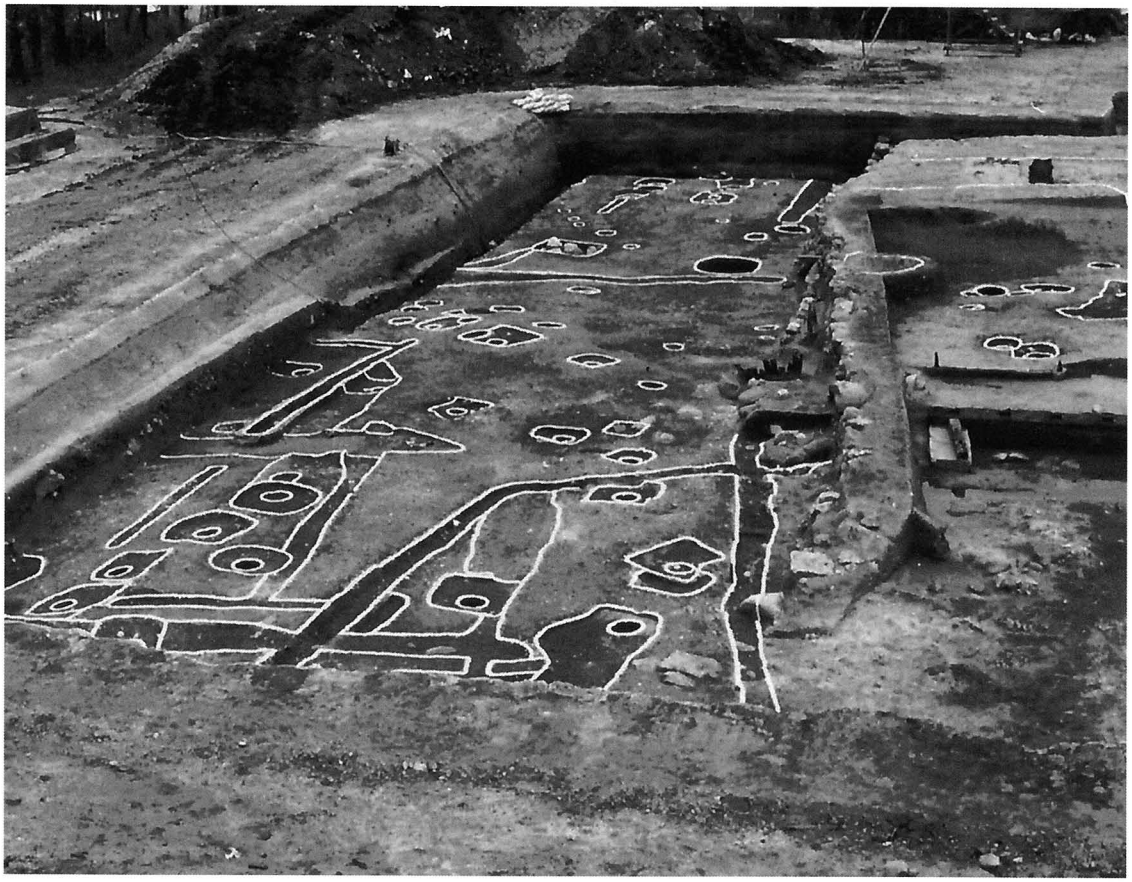
図版十　溝二　土坑一



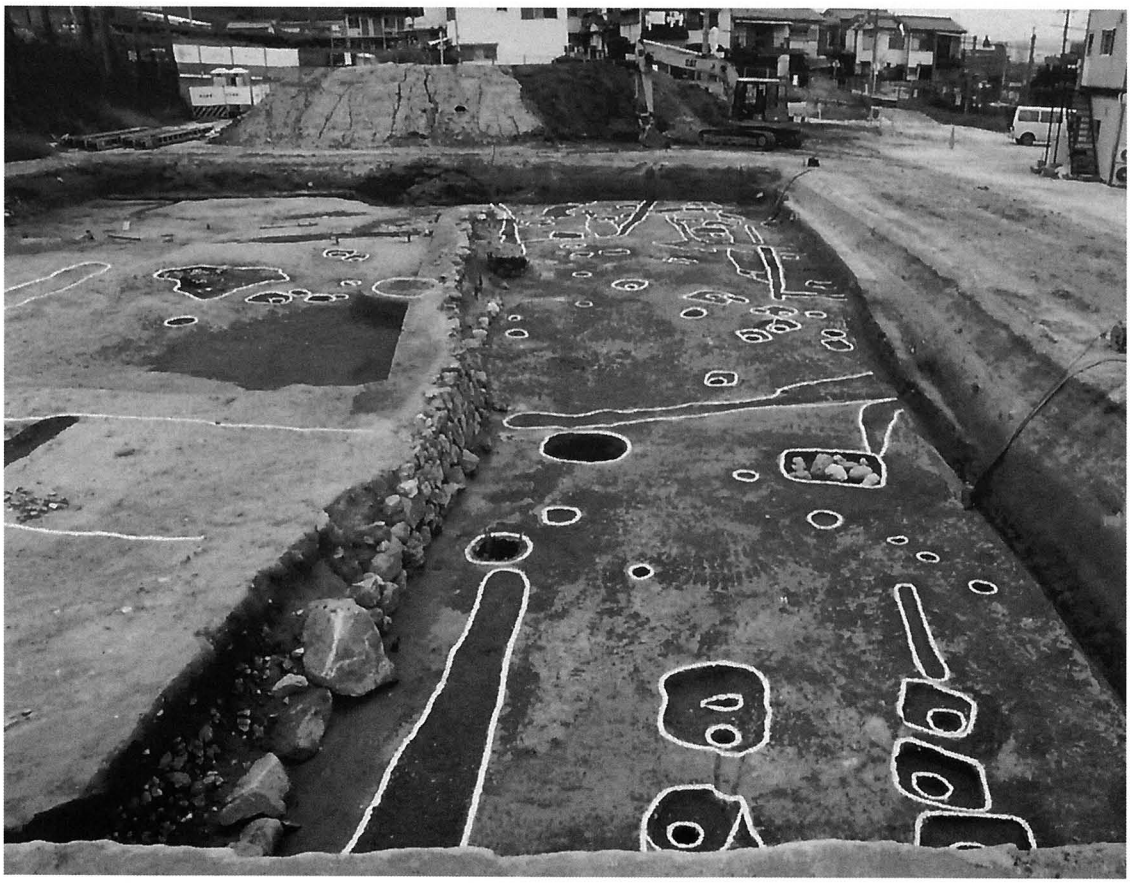
溝 2

土坑 1

図版十一　B区調査区（南側から）同（北側から）



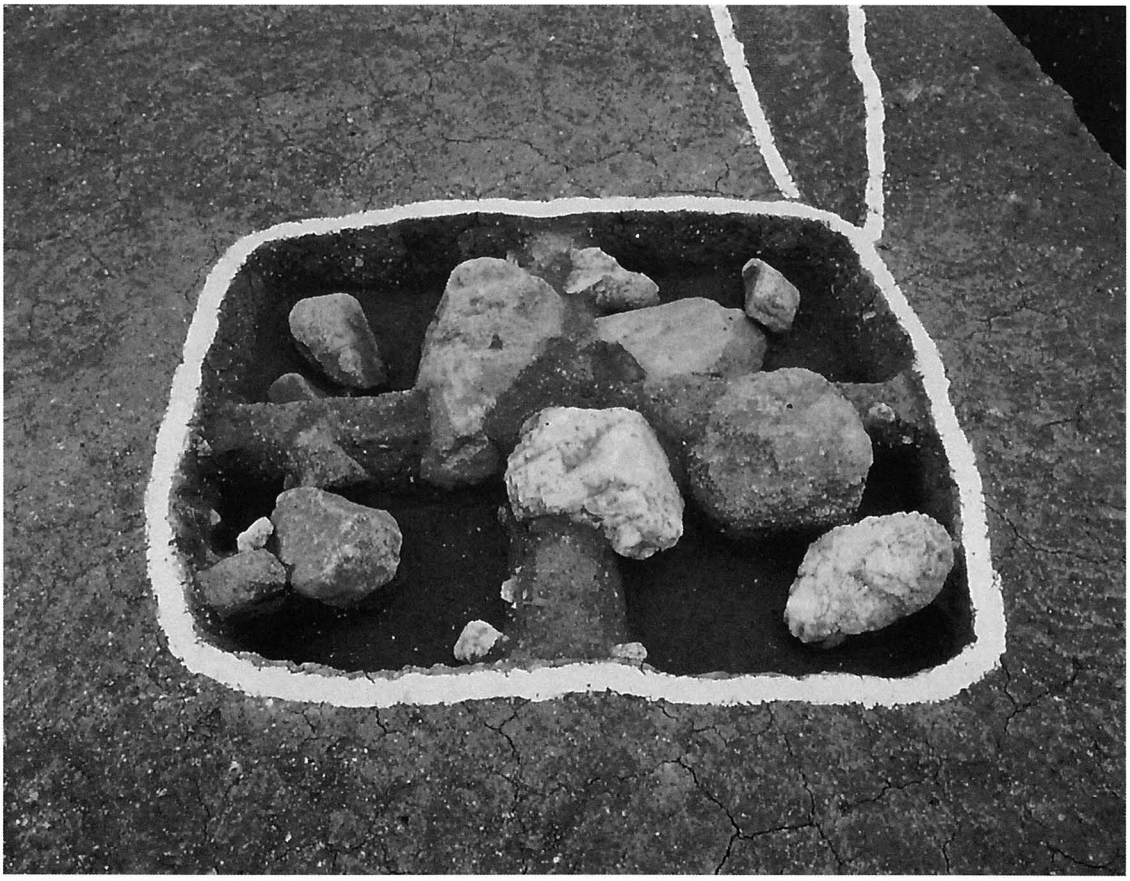
南側から



北側から

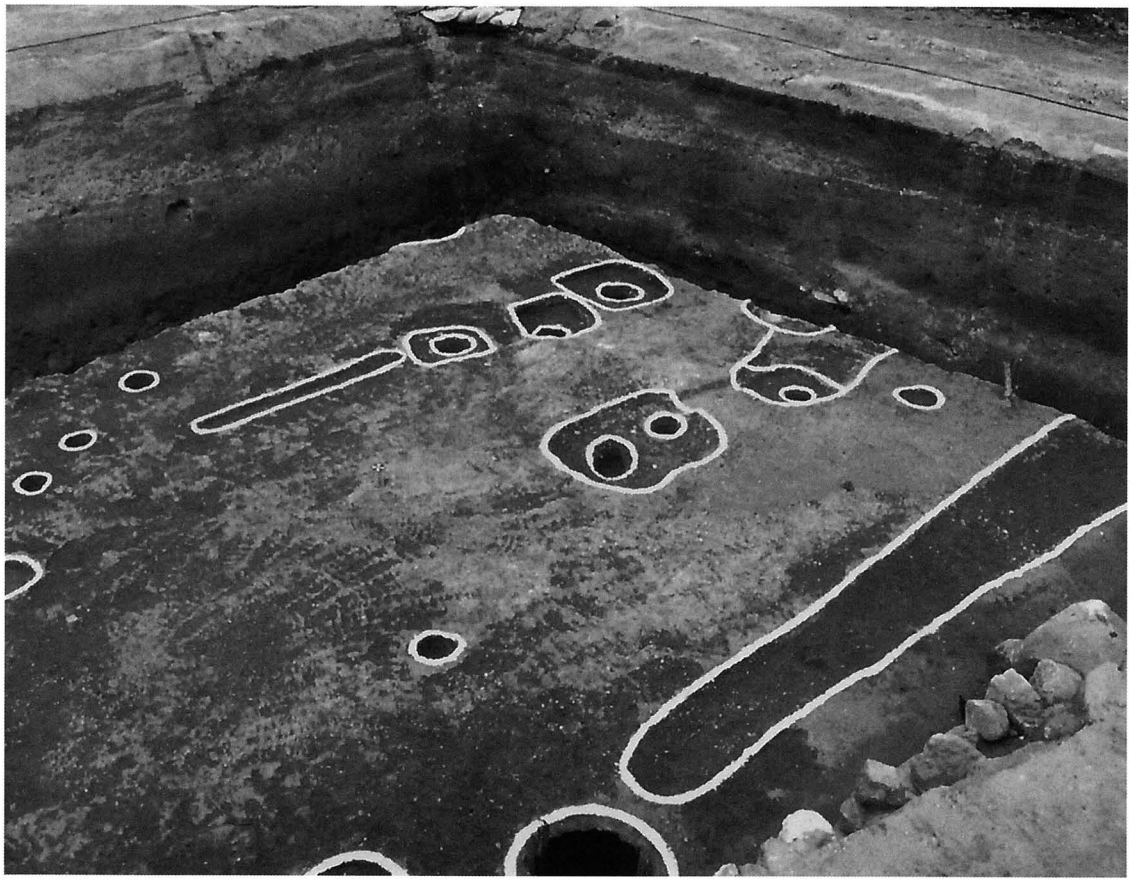
図版十二　土坑三（南側から）同（北側から）

南側から



北側から

図版十三　建物二・四



建物 2

建物 4

図版十四　建物五、六

建物 5

建物 6

図版十五　調査区北半部全景（南西側から）同（北側から）

南西側から

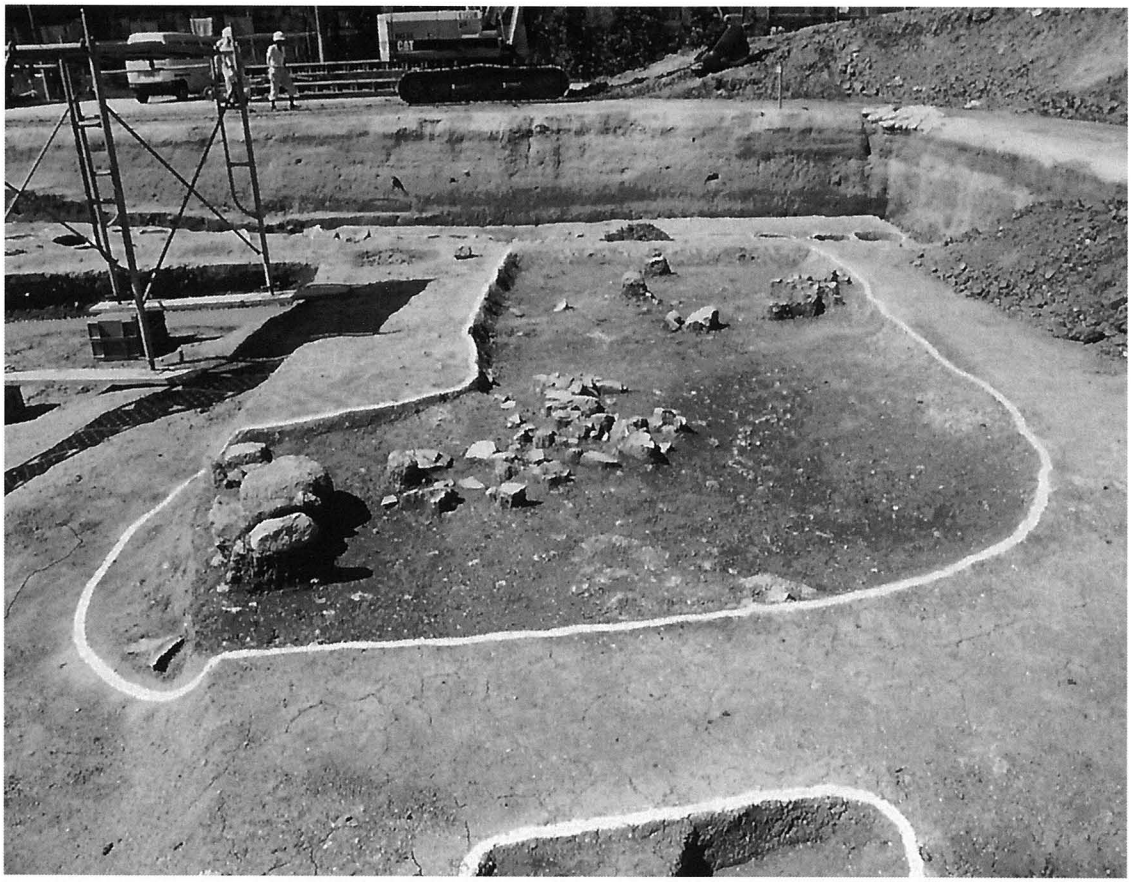
北側から

図版十六　建物一（北側から）（東側から）

北側から

東側から

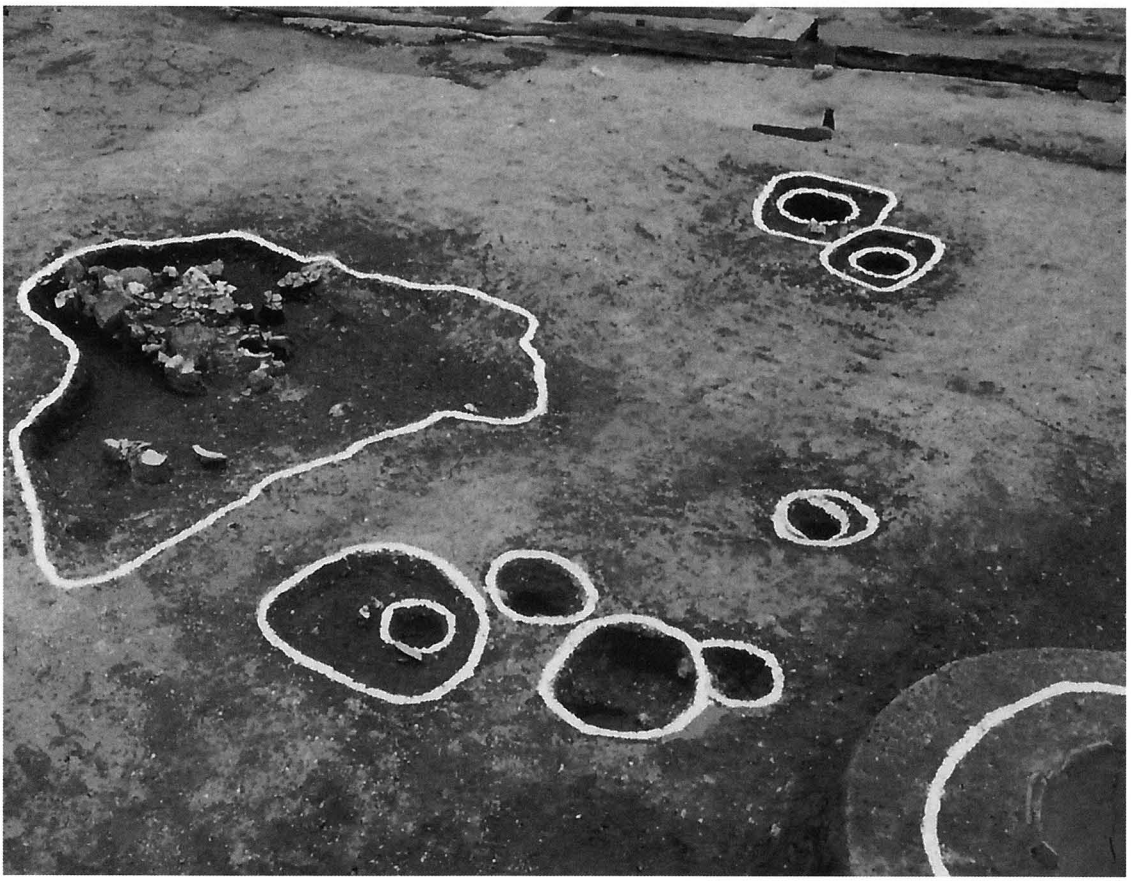
図版十七　土坑七（東側から）（南西側から）



東側から

南西側から

図版十八　建物三、土坑九

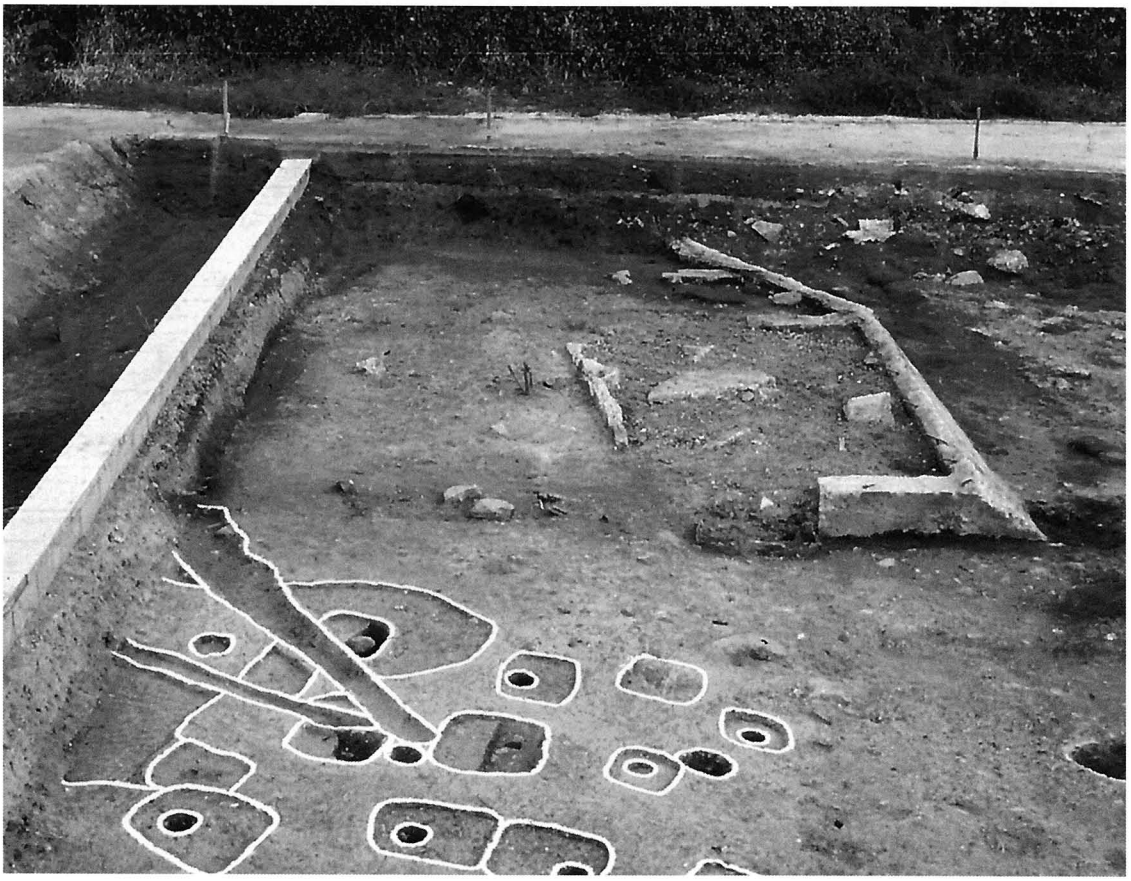


建物 3

土坑 9

図版十九　格納庫後（北半部）同（南半部）

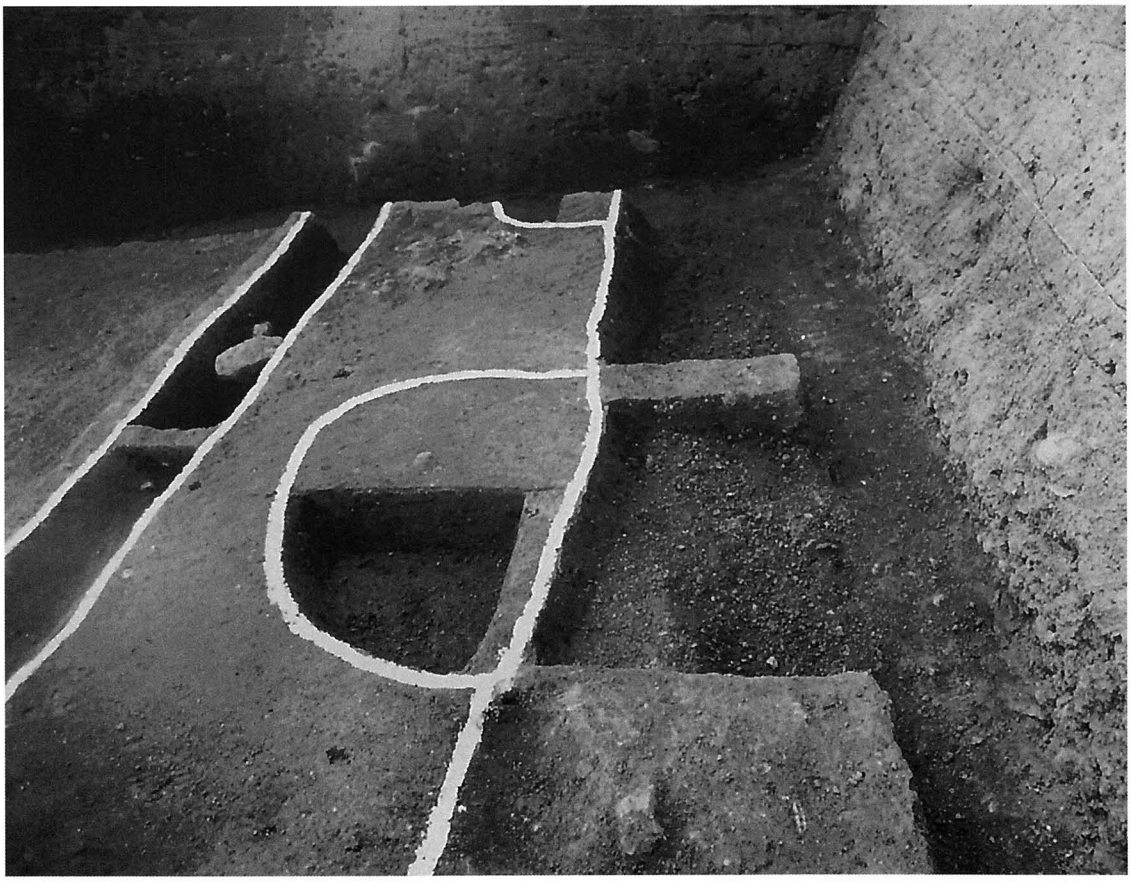
北半部



南半部

図版二十　土坑十一、十二、十三

土坑11



土坑12、13

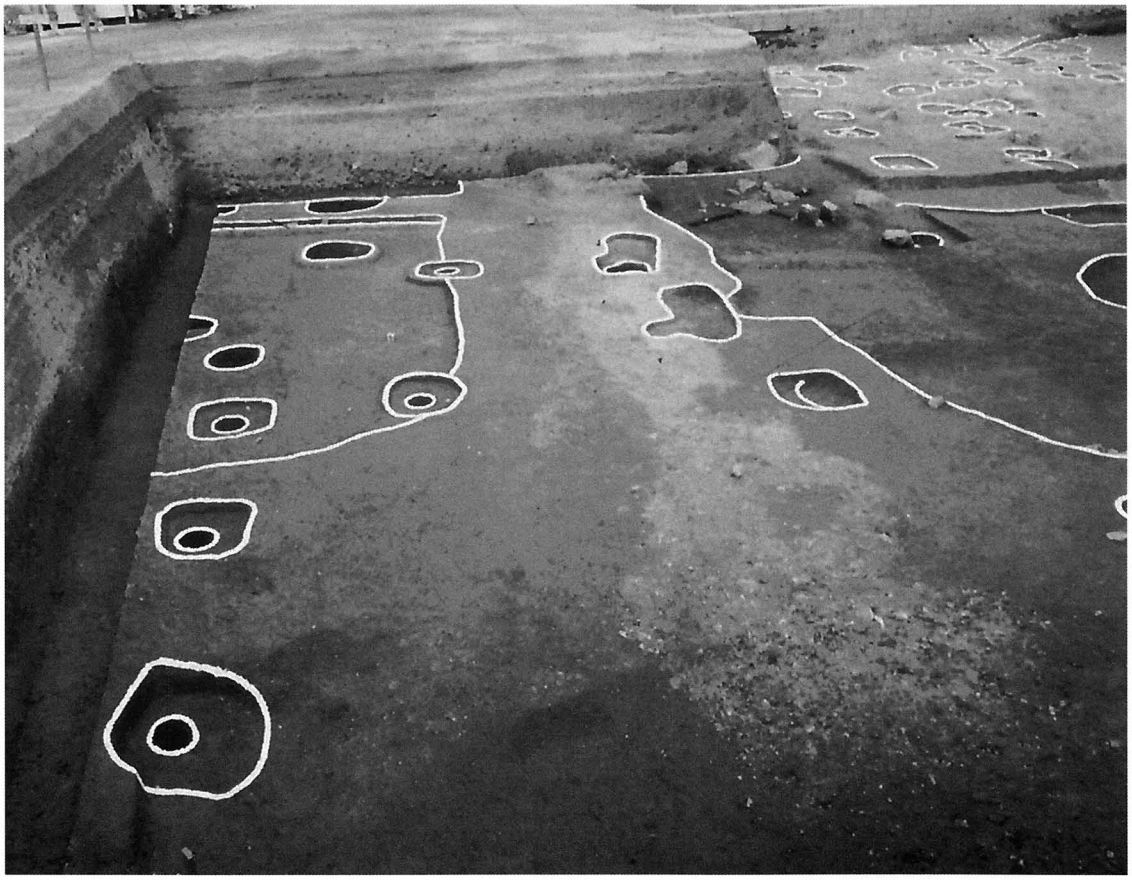
図版二十一　土坑十四（東側から）（北側から）

東側から

北側から

図版二十二　土坑十六、建物九

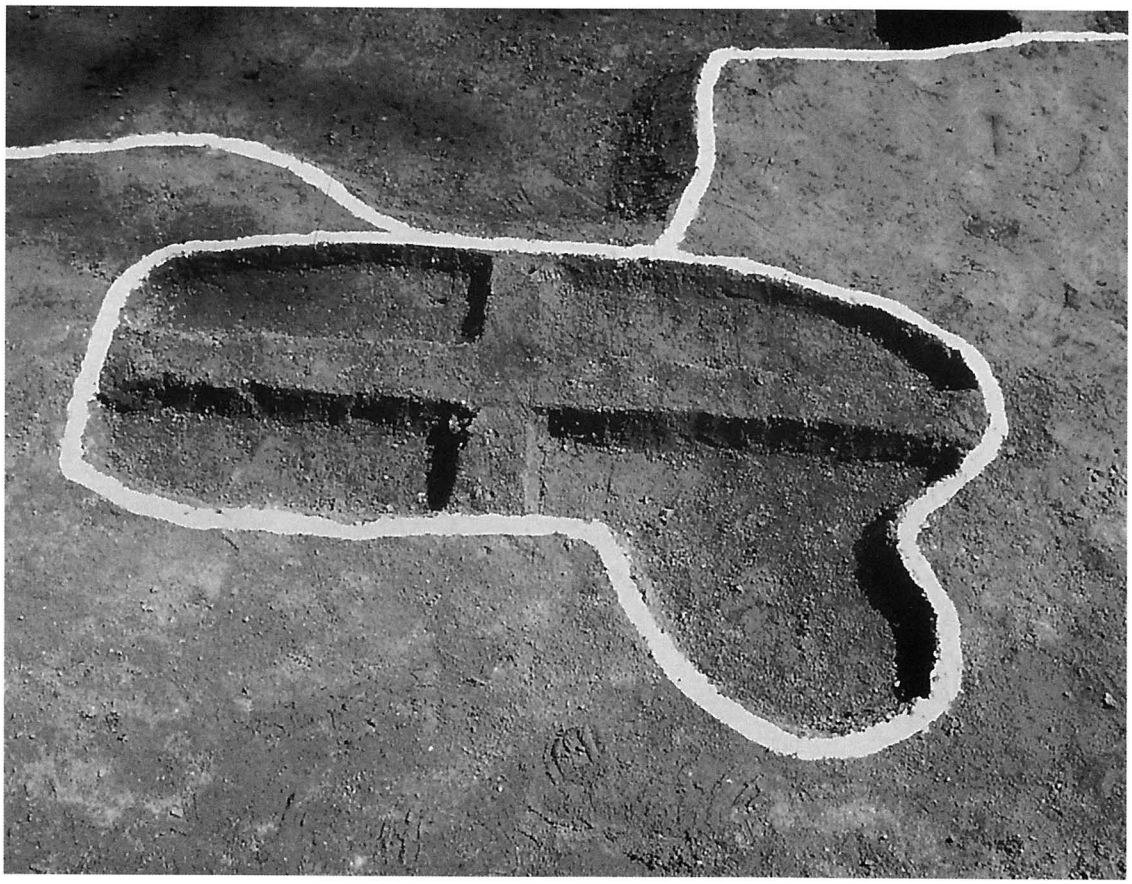
土坑16



建物9

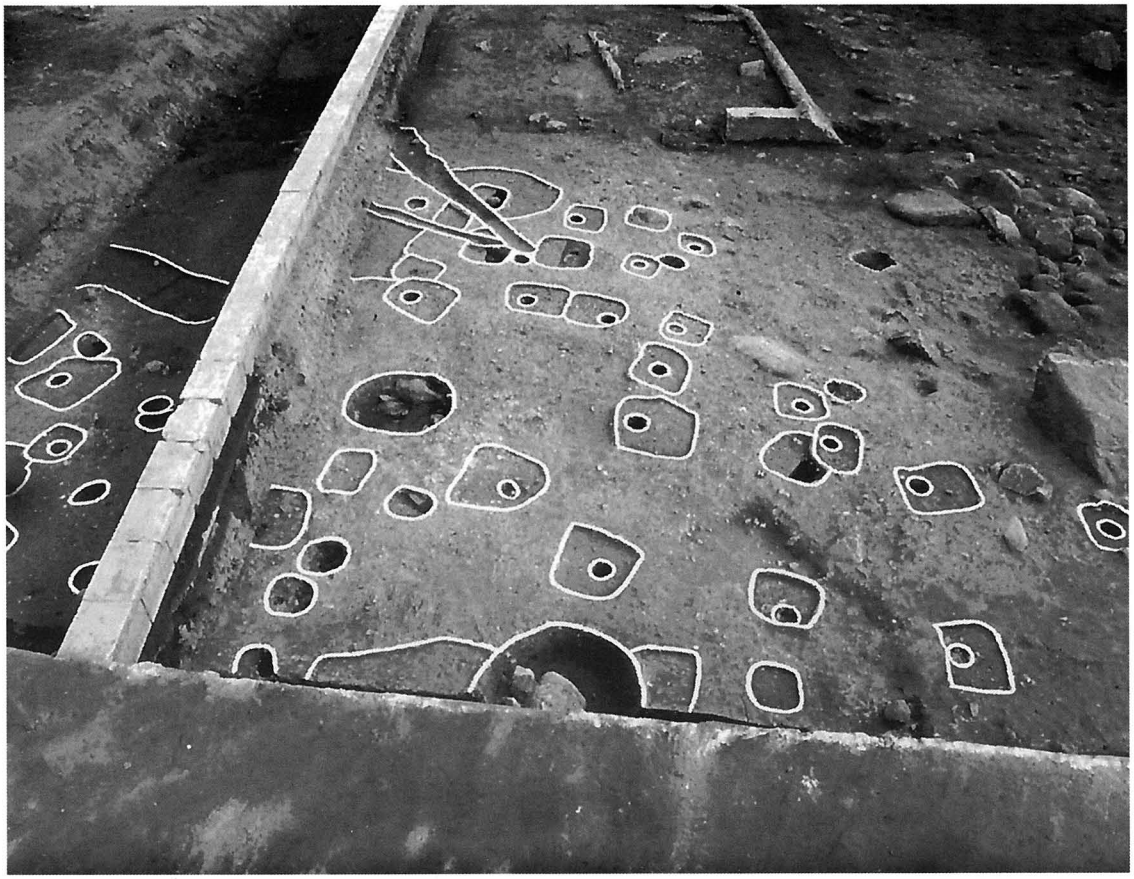
図版二十三　土坑十七、十八

土坑17



土坑18

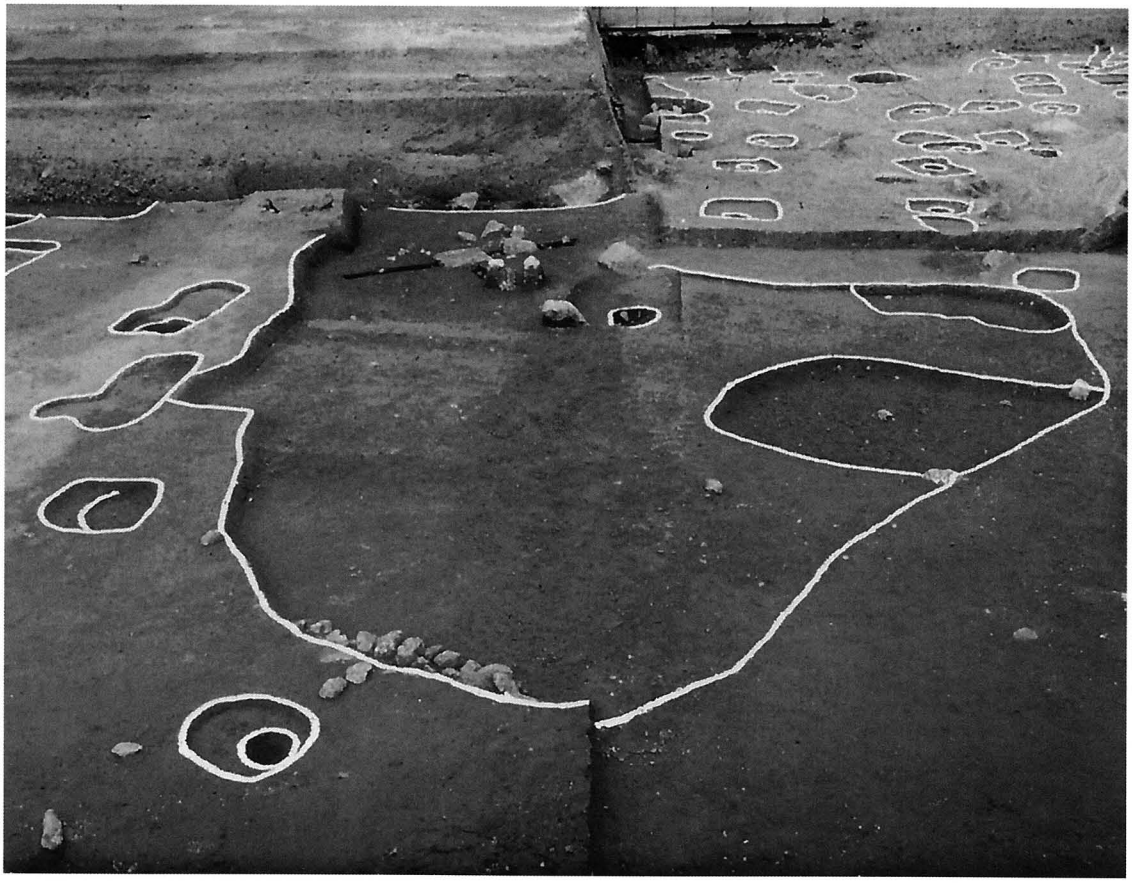
図版二十四　建物七、八



建物 7

建物 8

図版二十五　土坑十九、同石列



土坑19

石列

図版二十六　土坑二十、氾濫源

土坑20

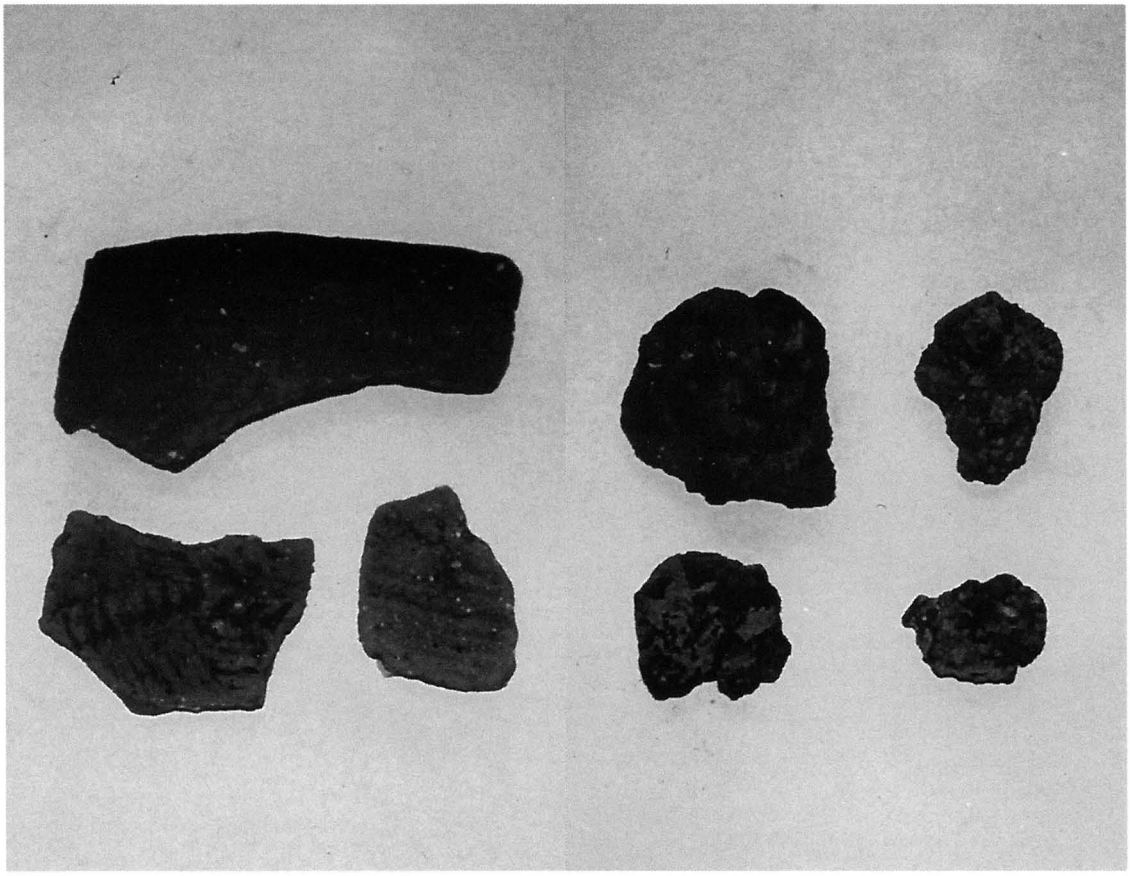
氾濫源

図版二十七　出土土師器、須恵器

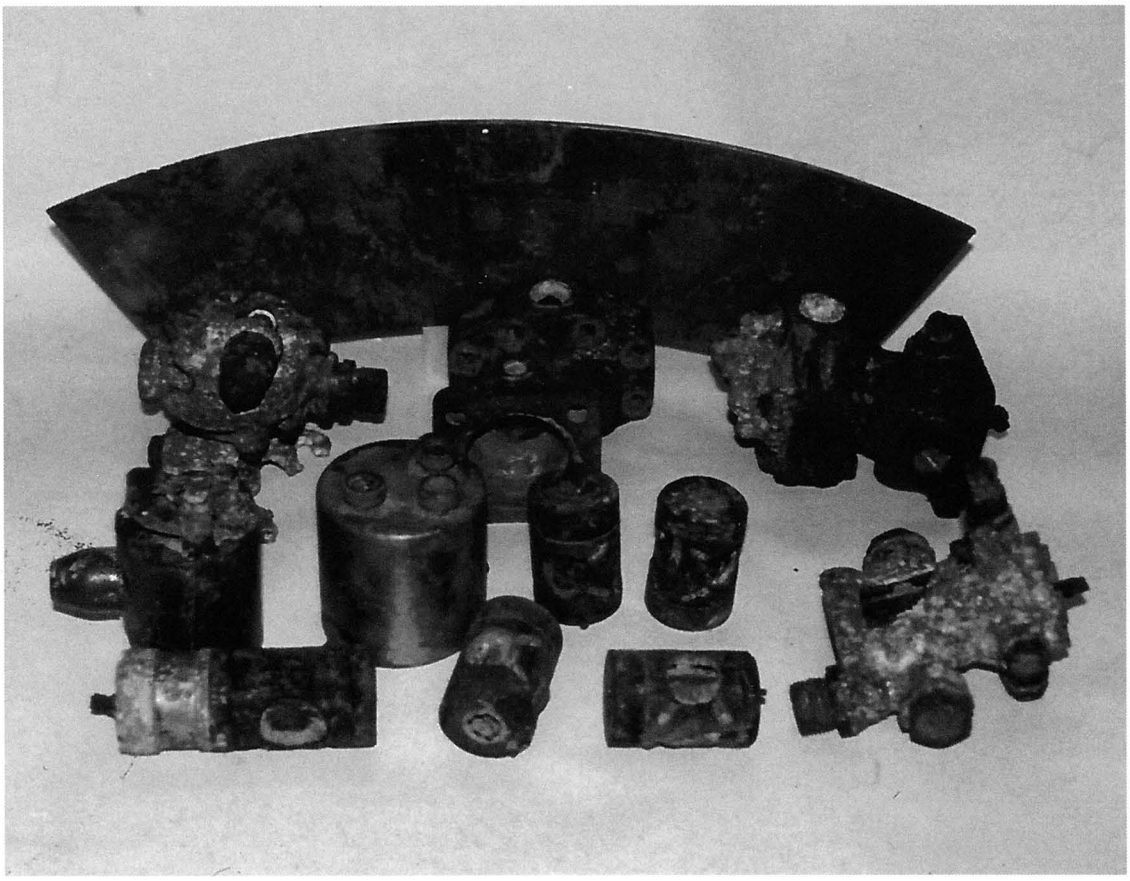
土師器

須恵器

図版二十八　縄文土器、鉄滓、格納庫出土遺物



縄文土器、鉄滓



格納庫出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおがたみなみいせき
書名	大県南遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	１９９８－Ⅱ
編著者名	北野　重
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582－8555　大阪府柏原市安堂町１－４３　　TEL　0729－72－1501
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′	東緯 °′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおがたみなみいせき 大県南遺跡	かしわらしおおがた 柏原市大県	27221	OGM97-3	34度 35分 10秒	135度 38分 10秒	19970806 ～ 19971107	1,500	健康福祉 センター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大県南遺跡	集落	縄文～近世	建物群・溝・ 土坑	土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器、瓦、鉄滓	古代寺院山下寺の近辺の集落群を検出した。

大県南遺跡
－仮称健康福祉センター建設に伴う－

1999年３月
編集・発行　柏原市教育委員会
〒582-8555 大阪府柏原市安堂町１番43号
電　話（0729）72－１５０１　内線5133
発行年月日　平成11年３月
印　　刷　東洋紙業高速印刷㈱